



都市環境デザイン会議

東京都文京区本郷2-35-10
本郷瀬川ビル TEL 03-3812-6664
TELEPHONE 03-3812-6828
FACSIMILE 03-3812-6828



発行者:都市環境デザイン会議 広報・出版委員会

●特集: 北のデザイン	1
1. 北のデザイン	1
2. 北海道の都市・田園空間の形成史を考える	2
3. 函館と小樽: まちを読む視点	4
4. 市街区画都市 札幌と帶広を読む	6
5. 屯田兵村と区画測設を読む	8
6. 旭川平和通買物公園のリニューアルデザイン	10
7. 旭川のまちづくり	14
8. リニューアルの歩み	15
9. 十勝の新しい風景を求めて	17
10. 十勝エコロジーパークに於ける住民参加の変遷	21
11. 北のデザイン雰感	24
●沖縄特集: 追加原稿	
11. 沖縄・ツーリズムの本質	27
12. 天久開放地、転じて那覇新都心について	28
●連載コラム	
遺伝子回路DNAの風景	29

特集 : 北のデザイン

特集

1

菅 孝能
SUKE TAKAYOSHI
広報・出版委員
株山手総合計画研究所

北海道と聞くと、私はいつも何か新鮮な気持ちになる。それは、北海道という何か本州とは違う異国性を感じさせる独特の気候風土、例えば梅雨の無い乾燥した気候、水田のように平らな平曠の重なる田園風景では無く、大地の起伏のままにうねりながら連なる畑の風景、などの印象のせいでもあろうし、明治以降に本格的に開発してきた歴史の若々しさによるものかも知れない。しかし、その若々しさを感じる歴史には、「街道をゆく15北海道の諸道」で司馬遼太郎に「呆然とした」と言わせた北国の開拓の過酷な歴史も秘められているのである。

そして特に、札幌や帯広などの都市や広大な田園の耕作地に見られるグリッドパターンに、自然に人間が手を加えていく強い意志を改めて感じさせてくれる。

グリッドパターンは、人間が自然界に人工物としての都市を創るときに採用する普遍的な大地のデザイン手法の一つである。

我が国でも、奈良時代の国家づくりで中国より導入された平城京・平安京の都市構造はその後の長い都市の歴史の中で基本構造を残しつつも変貌しながら今もその風格を保っている。

その後の中世・近世を帳じて城下町や公益商業都市等でも、地形に合わせた視覚的軸性や防御の経路の作り方などにより変形させながらもグリッドパターンを採用しているところが多く見られ、日本の伝統的な都市デザイン手法を形成してきた。

アメリカの殖民開拓都市の都市計画思想を導入して計画された「市街区画・屯田兵村・区画測設」といった北海道開拓・殖民の空間原理は、現代の生活空間の中でのような地域性を獲得しつつ、北のデザインとして永らえていくのだろうか。また、グリッドパターンに代わる新しい大地のデザインはどのように試みられているのだろうか。

そして、気候風土といえば北海道は雪と寒さ、冬の気候環境にどのようにつきあっていくかが、北のデザインの大きなテーマである。高温多湿の夏を旨とした日本建築では、近代に至るまで一度も北方の冬をしのげるような建物や装置を考え出したことがなかった。ストーブの普及は明治の開拓使顧問ケプロンに始まるそうだが、北海道に本格的な冬の建築が登場したのはこの20年ほどの間で、北欧やカナダをモデルに室内居住環境は飛躍的に向上した。では、その外部表現としての街並み景観や都市環境デザインはどうか。風土に根ざした地域性を持つ北のデザインの試みを探りたい。

北海道の都市・田園 空間の形成史を考え る

柳田良造

YANAGIDA RYOZO

プラハアソシエイツ（株）

北海道の21世紀の都市・田園づくりの方向を再検討すべく、北海道の地域空間の成り立ちを読む作業を行っている。

「日本の都市環境デザイン」の特集では、北海道都市の類型を港湾都市と内陸都市の対比、さらにそれを小樽と函館、札幌と帯広の対比で読んだが、北海道の地域空間の形成というもうすこしだけ大きな流れからみると、いくつかの新たな視点が浮かび上がってきた。

そもそも「北海道」という名が歴史に登場するのは明治2(1869)年である。その年5月に函館戦争が終わり、7月に開拓使の設置、8月15日に蝦夷地を「北海道」と改称し、10月にはその本府である札幌の都市建設が始まる、というあわただしさのなか、北海道開拓にかける意欲が伝わってくるような時代の最中であった。当時北海道の人口はわずか79,792人。ロシアや欧米列強の脅威のなか、広大な未開の原野の拡がる土地に人々を入植させ、地域を開拓していく都市づくりや農村開拓の計画や技術が文字通り切実に求められていた時代であった。もちろん「北海道の時代」以前にも、アイヌの集落であるコタンや、江戸期には松前藩の所在地であった城下町松前や漁場で栄えた江差、函館には漁業集落があり、幕末1854年には開港場となるなど、近世の都市形成は道南地域にある程度は進んでいた。しかし大半は新たに明治に入り、スタートさせねばならない事業であった。

従来北海道の都市や地域空間の形成史は、札幌や函館、旭川などの主要都市を除き、ほとんど行われていない。本特集は北海道の地域空間形成史の試論の一部を行おうとするものである。

北海道の地域空間を都市と農村エリアで計画の視点から分類すると以下のようにまとめることができる。

■都市空間形成

・市区改正都市

近世にルーツをもちその後の都市発展のなかで、明治期に街路や街区などの市区改正を行い、都市インフラを形成していった都市群、函館や小樽、江差などの港湾都市。

・市街区画都市

明治期に入り、原野の中に目的をもって都市建設を定め、街路や街区の区画、施設の配置を計画し、都市形成をおこなった都市群、札幌、旭川、帯広、滝川、名寄、網走などのグリッドパターンの都市形状をもつ都市。

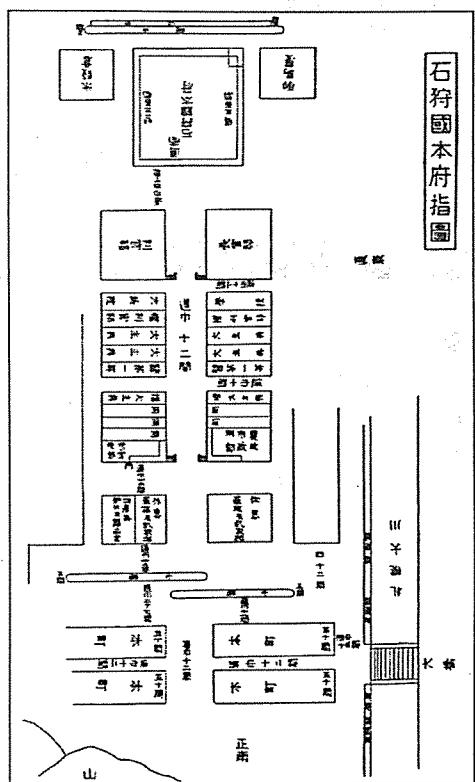
・産業基盤都市

明治中期以降、石炭や鉱山などの開発により、急速かつ企業経営的に市街地形成が進んだ都市群、夕張、三笠、芦別、赤平など空

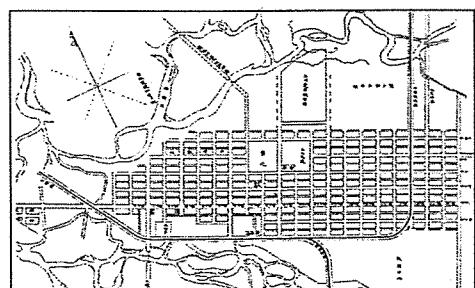
知地域の炭鉱都市など。



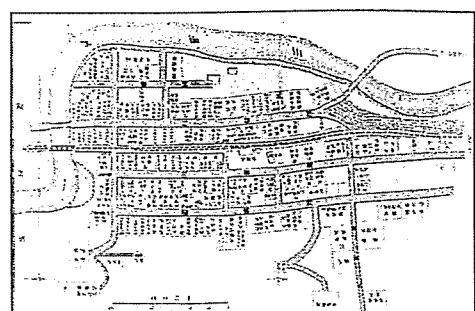
函館西部地区弁天町近辺(函館市史都市住文化編より)
(明治11,12年大火前後の町割・屋敷割比較図)



札幌本府指図(明治2年)



旭川市街区画図(明治31年)



炭鉱市街地図・美唄市我路地区(大正11年)

■農村空間形成

・士族移住村

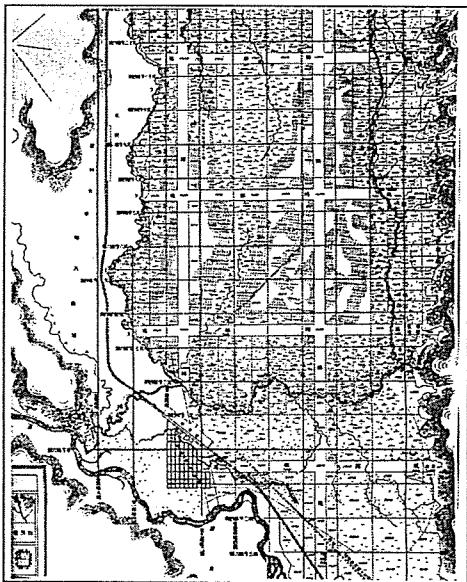
東北地方の伊達藩などの士族が、明治初期に藩主とともに移住し形成がはじまった伊達市や当別村、八雲村など。本府札幌を守る衛星村落として移住が計画された白石村、苗穂村、丘珠村、円山村も官による計画村落としてこの分類に入る。初期の地域空間は地形に沿い不整形な形態もつが、後期の開発ではグリッドパターンの散居的な開発になる。



伊達・士族移住村区画図

・屯田兵村

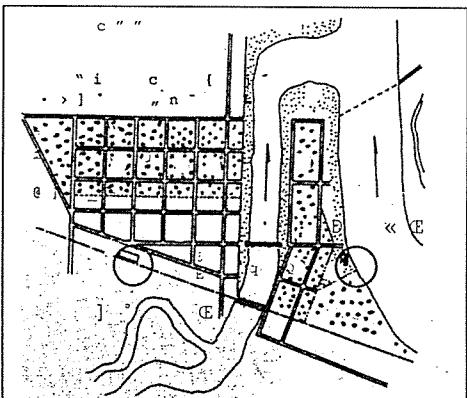
屯田兵村は、開拓と軍備を兼ねた制度で計画村落の典型というべきもの。当初札幌周辺に配置され、明治10年代後半には室蘭・根室・厚岸の太平洋岸の主要港周辺、20年代は内陸開発に向かい石狩川沿いの農業適地へ配置された。宅地と耕地を一体に計画、建設し、広大な原野のなかに様々な路村型のパターンを区画した。主要な道内農村の地域空間形成の基盤となっただけでなく、江別市、美唄市、深川市、士別市、北見市など、地域中心都市の市街地形成にもつながった。



富良野原野殖民区画図

・区画測設

北海道開拓の殖民の進めるべく、原野を測量区画し、農耕予定地を処分する制度で、明治23年に始まった。明治初期からこういう土地制度は課題であったが、アメリカやカナダの開拓でのタウンシップ制度などの研究を踏まえ、行政機構も体制が整った明治中期に入りようやく施行された。300間四方の区画を基本とする原野毎の計画であるが、明治29年に制度が整い、集落市街地、官公庁・病院・学校・公園の計画、防風林の配置などの本格的な農村計画の制度となり、道内のほとんどの農耕適地がこの方式で区画されていくことになる。道内農村を旅する時、大きなグリッドにそって、格子状に防風林の並ぶ景観はこの300間四方(540m)の殖民区画によるものである。



江別屯田兵村と川港市街区画図

■複合要因の都市空間分類

江別市のように屯田兵村にルーツをもつが、明治15年の鉄道開通により、石狩川の水運と鉄道の中継地として栄え、その後酪農や煉瓦産業のまちとしても発展した都市や、同じく屯田兵村にルーツをもつが、港湾都市として、製鉄の産業として発展した室蘭のように複合の要因をもつ都市も多い。その場合の分類は、主要な要因、江別であれば屯田兵村、室蘭であれば市街区画としている。

■北海道の地域空間形成史の意義

北海道の地域空間形成史のねらいは、歴史

的な形成過程やその構造特性を明らかにし、地域の空間計画論の原点を現代的にとらえ直し、新たな計画論の構築をめざそうとするところにある。北海道という一地方の地域計画史を考察する意義は、取り上げる市街区画、屯田兵村、植民区画という計画理念が、北海道という新天地の開拓という事情を考慮したとしても、近代の計画史上、独特の内容をもつものであり、その展開過程を明らかにする意味があること。さらに、地域における計画が近代主義に規定されつつも、地域の内在的発展の契機に促進されつつ展開してくる姿をみると..

函館と小樽：まちを 読む視点

森下滿

MORISHITA MITURU
北海道大学大学院

三ツ江匡弘

MITUE MASAHIRO
三ツ江環境意匠研究所

函館・小樽をどう読むか。明治末から昭和初期にかけてその絶頂期を迎える、一転戦後は日本の高度成長の時代に、蚊帳の外のように斜陽都市の名を冠される都市。しかしこの半世紀ほど前から、水辺と一体になった歴史的環境の整備により、観光都市としてよみがえり、都市再生の歩みを辿っている都市。こう書くとよく似た姉妹のようにも聞こえるが、実際はおおいに違う。都市空間は違うし、住んでいる人の気質も異なる。

「日本の都市環境デザイン」の特集では、函館と小樽の都市空間を都市形成をたどりながら、その空間の特性を分析したが、ここでは二つの都市の「まちを読む」新たな切り口を紹介したい。

函館：都市空間のインフラ・文化融合・ 市民自治

■都市空間のインフラ：二つの軸と三つの核

幕末からはじまる函館の市街地形成の空間を読むキーワードは「二つの軸」と「三つの核」である。

「二つの軸」とは大正期に市街地の発展とともに、遊山の場であった湯川温泉までたどり着き、沿線の郊外住宅地開発をリードした市電網と昭和9年の大火復興により完成した防火帯グリーンベルトである。

三つの核とは、函館山の麓の「西部地区」、大正時代に理想の郊外住宅地として開発された「東部地区」、幕末の歴史の舞台ともなりその後市街地中心のオープンスペースの核ともなった「五稲郭」である。

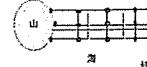
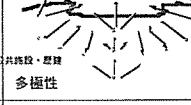
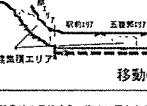
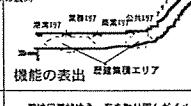
■市民の暮らしのキーワード：文化融合と市民自治

二つの軸と三つの核を都市のハードインフラ空間とするならば、そこで展開された市民の暮らし、生活のキーワードは何か？

一つは文化融合、二つ目は市民活動・市民自治（行政主導ではなく）であるように思う。

■文化融合 (cultural fusion)

北大の故足達先生は元町の東本願寺、カトリック教会、ハリストス正教会が建ち並ぶさまを「混在併存（異なるものがまじって、ならび存すること）」（この概念は大江宏が言い出しちゃうか？）とよび、函館西部地区の町並みの特徴とされたが、これをこえて、文化融合（=異質の文化が一つにとけあうこと）と言うのがふさわしいのではないだろうか。和洋折衷町家と函館野外劇はその象徴。1階を和風、2階を洋風とする和洋折衷町家は、きわめて独特ではあるが、異質のデザインが統合されて一つの建築様式と化しているように思われるし、また、五稜郭での野外劇はフランス人の神父さんが言い出

	函 館	小 樽
発祥發 と展	15C頃、和人が住み始め、江 末期、開港場となることを契機 として發展	17C頃、漁場として開け、明治 維新後、札幌本府の外港として 發展
都 市性 の格	日本を代表する海の玄関口	北海道の海の玄関口
地 勢	海、山、坂、平地	海、山、坂、河川、埋め立て地
都 市 の 骨 格	防火帯としての山地・隣地の骨格  構築的	 地形に対応した近隣のまつり 即地的
都 市 の 構 造	 段階的	 港、浴場、住宅エリア 港、清水浴場 港、海水浴場 一望的
都 市 部 の ア イ デ イ ー (①)	 メリハリのある配置 方向性	 ランドマーク 港への航路 多様な配置 多極性
都 心部 の ア イ デ イ ー (②)	 立ちの狭長 田舎の風貌 移動の表出	 グレー（駅・会館・オフィス） （森・草・山）グリーン 青緑197 黄緑197 高純度197 機能の表出 田舎風景エリア
海 の イ メ ー ジ	 海岸は平島状ゆえ、海上に浮かんだイメージ 湖的	 海は円筒状ゆえ、湖を取り囲んだイメージ 湖的

函館・小樽都市空間比較分析図

しっぺになってフランスの小さな街の野外劇をモデルとしているが、いまや函館のもの、函館市民のものになっているかのようである。この「融合fusion」という概念は、Gregory Clancey 氏が1996年頃に東大・鈴木博之研究室に留学し、明治学院インブリーギャラリー修復プロジェクトに参加し、その英文報告書で記述されていたもので、とても良い言葉だと思い、よく使わせてもらっている。21世紀の世界的課題（文化（民族）対立、文明の衝突）に応えられる概念であると考えている。

市民自治

三つの核の「西部地区」、「東部地区」、「五稜郭」のいずれもが、市民が主体となって地区的再生をおこなってきた。「東部地区」の良質な住宅地の形成と維持も、市民がリーダーシップをとってきた。「市民自治」は21世紀の地域まちづくりの課題でもある。

小樽：歴史的建造物の再評価からまちを読む

■分析の視点

「小樽には、明治大正期に全国的に活躍したアーティスト（建築家）達の作品が数多く

残っている」と言われるが、このフレーズは、正しい表現といえるのか。また、「全国の中でも小樽のみが使える言葉」なのか、つまり、「小樽と同じ様な、“まち”が他に無い」のか、という疑問が浮かぶ。この疑問に応えてくれる、小樽の特異性を述べる客観的なデータが、実は見当たらない。

小樽には著名作家による建築物のほか、土木構築物にも著名技術者の作品が残っていることもあるので、“アーキテクト”を、建築のみならず、土木・造園の設計者も含むと捉えなおし、「小樽に作品を残したアーキテクト（土木技術者・建築家・造園家）達の、小樽以外の土地につくった作品は、現存するのか」という視点から調査を行い、客観的データを収集して、そのデータを下に、冒頭の疑問を晴らしたいと思う。これは、建造物を切り口として、小樽の歴史的環境を再照射する試みともいえるだろう。

■小樽は近代建築の教科書

全国的に活躍した土木技術者、建築家、造園家達の手による作品が、これほど揃い、残っている地域は大都市を除けば、小樽しかないことがわかった。加えて小樽の様に、小さなエリアにコンパクトな形で収まっている状態は、極めて特異である。

小樽は数多くの歴史的建造物の存在によって「小樽は、近代建築の教科書」という言葉も今回の調査から正しい表現であると認識できた。また「小樽は、近代化遺産の宝庫」という言葉も同様である。

■まちの特性

まちの暮らしを下支えする基盤整備は、近代土木の権威である廣井勇（北防波堤・運河）、そして近代衛生工学の父といわれる中島銳治（奥沢水源地）。業務地区は、辰野金吾（日本銀行旧小樽支店）をはじめとする、名だたる建築家達（佐立七次郎：旧日本郵船株式会社小樽支店、曾禰達三：旧三井銀行小樽支店など）。市民生活のレクリエーション施設においては、長岡安平（旧花園公園・手宮公園）など、今にその名を残す偉人達の作品が残る小樽。当時の市域や人口規模を考えると、名だたるアーキテクト達の手によって、小樽の“まち”が、つくられたといつても過言ではないかもしれない。また、当時人口が少なく、都市として新興のまちでありながら、名だたるアーキテクトを利用する背景が、そこには必ず存在する。端的に表現すれば、当時小樽が、いかに重要な土地として位置づけられていたかが、伺えると言えるだろう。歴史的建造物の設計者を切り口として、小樽の特性が、おぼろげながら見えてくる。

次に、都市環境づくりの三大分野の三偉人（廣井・辰野・長岡）の作品から、「小樽の特性」について分析、考察してみたい。廣井は、“北防波堤”によって小樽の港湾整備を図ると同時に、それを從来日本ではつくることが出来なかったコンクリート製の外洋防波堤によって完成させようとした。新技術開発が伴う国家プロジェクトとしてその仕事は執り行われた。そして、長岡は、日本の三大公園を引き合いに花園公園を「天下に誇れる大陸的で雄大な設計を行った」と述べ、それまでに無い公園デザインを施そうとした。商業地である小樽を、市民生活のための公園を考えつつ、花園公園の再整備によって観光地化しようとも図っていた。また辰野は、日本銀行小樽支店を建てる際、天候や海の状態、船の出入りが確認できるよう、海を眺められる望楼をつくった。日銀本店、各支店には見られない、港湾都市小樽という地域の特性から編み出されたデザインである。これは、日本では風土性を持たない洋風様式建築を、如何に地域性を取り入れながらデザインし、土着的な建築へと昇華させるか、という試みではないかと推測する。この分析から彼ら三人に通底するのは、将来の住まうべき環境づくりのあり方を問う思考であり、これから的新しい生活を切開いていくとする姿勢が伺える。そして、その実現が小樽での作品であり、それは当時のわが国における都市環境づくりの最先端の設計思潮によって生み出されているとも言えるだろう。この様に考えると、“小樽は明治後期における「都市のユートピア」を体現した『まち』”と表現できるのではないだろうか。三偉人による歴史的建造物からの、小樽の“まちの特性”である。

■都市環境デザイン調査研究における

立脚点と意義

本調査は、建築物のみならず土木構築物、造園施設を含め、それらを歴史的建造物として一括りにして、それらを群で見た場合、どの様に位置づけられるのかを問うものであり、研究の新たな視点を加えるものである。建築、土木、造園と個別に見ても、都市環境全体の価値は浮かび上がってこない。環境に切れ目は無く、一連の空間の中に存在する。市民生活においても、それらを切り離して思考したり、語ったりしないはずである。これは都市環境デザインを業務とする者として持ち続けたい視点ではないだろうか。従来の研究が、ひとつひとつ細分化して見ていく「微分的」行為だとすれば、本編は環境全体として何と言えるのか、全体の中での位置づけといった対象をトータルで見ようとする「積分的」行為を行う調査研究の視点である。

市街区画都市 札幌と帯広を読む

柳田良造

YANAGIDA RYOZO
プラハアソシエイツ（株）

酒本宏

SAKEMOTO HIROSHI
(株) グランドデザイン

山崎正弘

YAMAZAKI MASAHIRO
(株) HAU計画設計

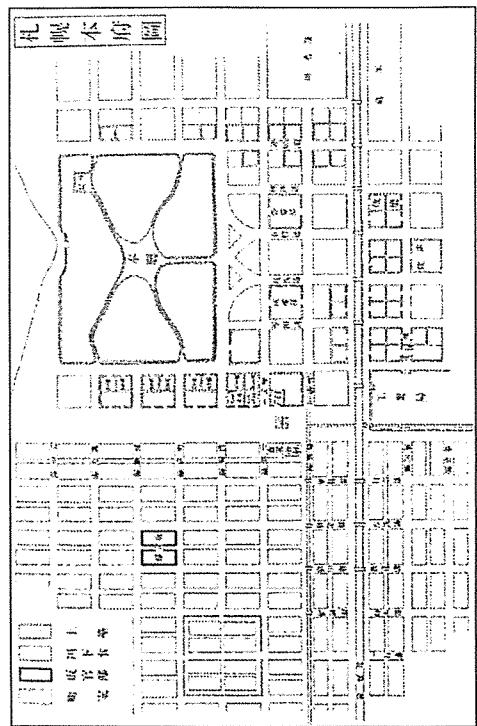
■村落に先行する都市形成

北海道の開拓過程における地域空間形成の特徴をあげるとすると、まず第一に村落の成立より先に都市の建設が先行するということである。一般的に都市の成立はヒンターランドとしての広範な農村などの居住地域を背景に、物資、情報の市場交流拠点として、地理的条件に恵まれた場所が市街地に発展していくものと捉えられよう。しかしこの原理は北海道の開拓過程にはあてはまらない。

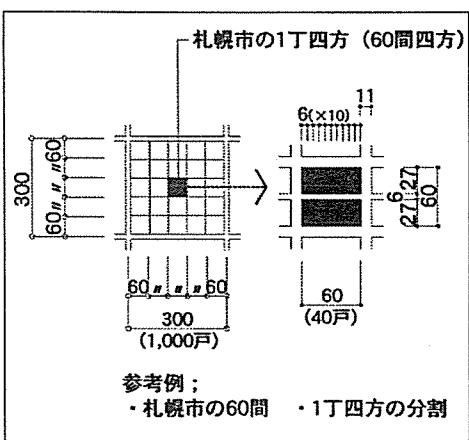
北海道の開拓農村の空間構成は1戸5町歩をベースとする散居集落であり、密集的村落は成立していない。一方経済システムとしては、本州の農村に比べればより交換経済化しているため、その中心市場的な空間の存在が必要欠くべからざるものである。そのため地域空間の生活構成上、開拓当初から小市街地的空间を必要としており、そのため計画的な配置を考えていた。例えば屯田兵村においても、番外地と称して耕宅地とは別に中心地区の一画に商業者の区画を設けていたし、殖民区画でも市街地が計画的に農地区画の中に設定されている。そういう開拓における意味をもった存在としての都市形成の事例が、札幌であり、帯広なのである。ただ札幌は北海道全体の本府として、帯広は十勝開拓の中心として位置づけられたため、それぞれ特別な市街区画が行われることになったのである。

■札幌：60間四方の街区

都市形成史からみると、明治2年の札幌の創成期のパターンの原型は、城下町と平安京の混合と言われる。函館戦争が終わってまだ半年、江戸がようやく終わりかかった時代であり、プランは近代というより、近世の封建性の残滓を引きずる計画であった。開拓使島判官の綱張では、まず開拓使本府庁舎の区域(300間四方)を決め、その南前に長官邸や判官邸、学校、病院をおき、さらに各役人の居宅、倉庫がつづき、官有地と民有地の間は大通でもって区切られ、官有地は堀と土塁によって囲まれたように城下町的なゾーニングをもっていた。明治4年、岩村判官に交代後、本府庁舎正面が東にふられるなど、一部計画変更されたが、基本は変わらず、街区の測量が始まり、平安京と同じく60間四方の街区とし、2行6門に分け、幅



明治4年の札幌本府図



札幌の街区形態

6間の中通をつけ、1戸当たりの敷地は5間×27間となる。市街地と官有地の間は58間街路(現大通公園)で区切られる。この札幌の60間四方の街区は、その後の市街地形成に影響を及ぼしていく。明治20年代の旭川や帯広の市街区画では、に留学した計画者の存在やお雇い外国人の影響から、遠くアメリカの都市区画の影響などが指摘されるが、基本となる街区形態は札幌の60間四方の街区が各都市でも踏襲されていくのである。また封建性の残滓ともいえる原理で計画された本府庁舎の大街区(スーパープロク)や大通の存在は、その後中心性をもつ

都市	街区	敷地割
●札幌 (M4)	60間×27間 中通6間巾	間口5間×奥行27間 (135坪)
●根室 (M8)	60間×28間	間口6間×奥行14間 (84坪)
●旭川 (M22~25)	60間×27間 中通6間巾	間口6間×奥行27間 (162坪)
●滝川 (M25)		間口5間×奥行27間 (135坪)
●帯広 (M26)		間口6間×奥行27間 (162坪)
●名寄 (M34)	60間×26間	間口6間×奥行26間 (156坪)

市街区画都市の街区形態

空間として貴重な場所となるが、近代の理念で計画された旭川、帯広、名寄などの各都市に、そういう中心性をもった空間がうみだせなかつたのが、皮肉といえば皮肉である。

■帯広：河港と市街区画

帯広の位置する十勝平野の内陸部に開拓の鉢が下ろされるのは、明治16年（1883）、依田勉三を中心とする「晩成社」の入植による。晩成社の開拓は様々な困難にぶつかるのだが、明治24年に道庁による広大な十勝平野の区画測設が始まり、本格的な十勝開拓が始まる。その起点となつたの帯広の都市建設である。

帯広市のある十勝地方は、標高2000m級の石狩山地や日高山脈などにより、札幌のある道央地域とは地理的に分断されていた。このため、開拓も道南からの航路が唯一の交通手段であり、帯広より先に発展したのは、太平沿岸の十勝川河口の大津や広尾という地域であった。

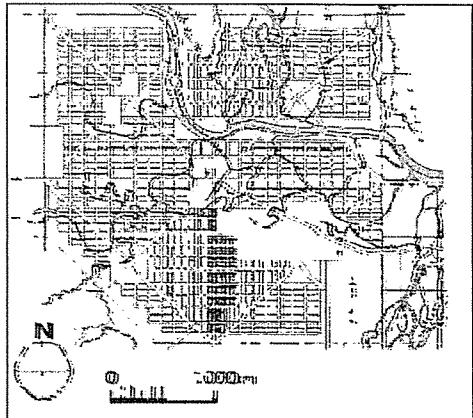
明治26年（1893）頃の「河西群帶広村市街地予定地平面図」と記された市街地図がある。そこには、300間四方に区画測設された原野のなかに将来の市街地を盛り込んだ壮大な帯広市街地全体像が描かれている。この計画は、河口のまち大津と帯広をつなぐ大津街道と十勝川を利用した交通を想定し、十勝川の南に基点を置き、その起点に大街区の物流施設や官庁街など中心を形づくり、十勝川をまたぐ形で市街地が展開される構想であった。

しかし、市街地では鉄道開通以降に次第に構造が変わろうとしていた。開拓当初、起点付近の大通り沿いに繁華街ができた。しかし年中行事のようにひきおこる河川の氾濫は、市街地北から西にかけての展開を制約した。また、交通体系も鉄道主体へと変わり、繁華街が駅付近へと南下した。さらに、音更に渡る橋が西2条通にできたため、繁華街が西へ移動する。

帯広で見られるように、北海道の中の開拓によって形成された都市を見ると、開拓当初は、河川の蛇行部に船着場と合わせて市街地が形成されることが多かった。しかし、鉄道の開通により市街地の中心が、鉄道駅周辺に移り、その後の河川改修などもあり河岸の集落はにぎわいとともに次第に消え、まちの発祥の地が草地などになっている地域も少なくない。

■新たな帯広の顔－「北の屋台」

帯広駅の北側は中心市街地なつており、多くの商業異説や飲食店などが並んでいる。大正後期から昭和の初め頃、多くの露店が建ち並び、商店街として賑わいを見せ発展してきた。南北の通はコミュニティ道路と



河西群帶広村市街地予定地平面図（明治26年）

なつてゐるほか、かつて露店が多く並んだ東西に延びる八丁目通はアーケードが設けられた商店街になつてゐる。

しかし、帯広市の中心市街地も、他の地域と同様に空洞化が進んでゐる。郊外に大きな駐車場を伴つて開発される郊外型大型店とその集積が進み、中心部からは大型店や有力店が撤退していき、次第に中心市街地は寂れていつた。こうした中、JR帯広駅から徒歩5分にある火災で焼失した市場跡地を活用して平成13年7月に、中心市街地活性化と起業家育成の場として「北の屋台」がオープンした。

1区画約10m²の屋台が、ガス・電気・水道完備、共同水洗トイレやロードヒーティングが設置された屋台村に、20区画18名が出店している。平成14年3月末までの来客数は約10万人、総売上高も予想を上回る好結果を出している。

屋台は、初期投資が低額で、顧客とのコミュニケーションも豊富で商売の原点であり、屋台で軌道に乗つた人は、屋台を卒業して店舗を構えるなどのインキュベーション的機能もあり、起業家育成にもつながることに目をつけ始められたものであり、この屋台村からも卒業生が生まれている。

中心市街地活性化の取り組みは全国各地で行われ、大きな成果が少ない中でハードにこだわらず、身の丈にあった、出来ることから実行する「北の屋台」は、帯広の中心市街地に一石を投じた結果となり、触発された人達が中心市街地で色々な活動を始めるなど、まちを変えるきっかけとなつた。帯広の厳しい寒さの中、熱く燃える屋台村は帯広のまちの顔になりつつある。

この街区を突き抜ける屋台村の道が、整然と区画された街区のなかにあって単調になりがちな市街地空間にアナーキナーな場所の魅力を付加し、自由通路的空間を出現させたのは、21世紀の北海道の都市の市街地空間を成熟させていく一つの仕掛けになるようと思えるのである。

屯田兵村と区画測設 を読む

柳田良造

YANAGIDA RYOZO

プラハアソシエイツ（株）

■屯田兵村の形成

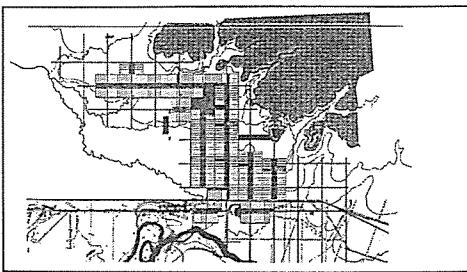
屯田兵制度は明治7年に制定された営農と軍隊組織を兼ねた独特的の制度である。制度の目的は道内の警備、開拓および士族の授産にあったが、その特色は兵士が官給の1戸建ての兵屋に家族とともに暮らす生活を通して、練兵と営農に従事したことである。そのため軍隊組織の中隊を単位しながらも集落を形成する地域空間が計画されたため、その後の地域空間の様々な基盤形成につながった。1戸当たり給与された土地は1.5万坪（初期は1万坪）、1中隊の兵屋数は、200戸（初期は240戸、220戸）を基準とし、明治8年最初の村落が札幌本府郊外の琴似に誕生以来、明治37年の制度廃止までの間、江別、美唄、滝川、旭川、北見などに37兵村、兵屋7,300余戸を建設し、家族をあわせて39,900余人を収容した。

■屯田兵村の地域空間形成の特色

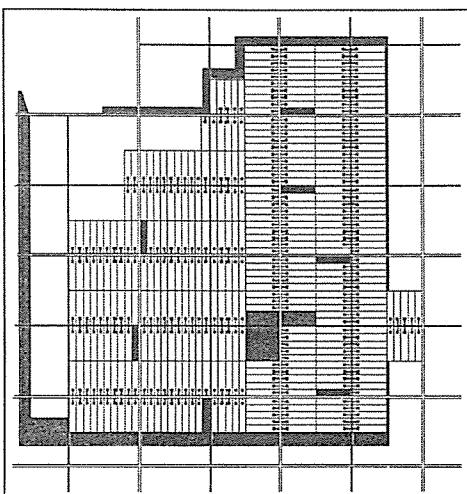
- ①場所の選択では、地形は丘陵地や扇状地が多い。配置上、兵村の主要軸に周辺の山、丘への軸線が援用されたことが伺われる。
- ②兵村のスケールとして召集喇叭の音が手がかり。喇叭の音は約25町=2.73kmの距離まで届くので、中隊がその範囲内に兵屋を配置したと言われる。
- ③兵村の規模は全体で1.5万坪×200戸×2+公有地（約27万）坪=627万坪（2,069ha）ほどもあった。この規模は千里や高蔵寺のニュータウンよりも大きい。まとまった面積の開発であるため、幹線道路や将来的な鉄道の整備も含め、地域空間形成の大きな計画的な秩序基盤となったこと。また共有地の存在が、地域自治体形成の基盤となつたことや、江別市では戦後大規模ニュータウン（約200ha）が計画されるが、その敷地は屯田兵村の薪炭林であった場所であるなど、地域の大規模開発の種地なつたことなども伺える。
- ④中隊本部、練兵場、小学校・医療所、番外地（商工業者用地）など練兵や生活上の必要施設を兵村の中心に配し、その周りに耕宅地を配置するサイトプランである。明解な中心性はもつことがその後の地域空間形成のまとまりをつくる核となった。
- ⑤耕宅地の配置は班という10戸のまとまりの単位を基本とした路村的な配列で、地形や土地の広がりに対応し、サイトプランを計画している。中隊という200戸前後の戸数で拡大することは前提としているため、全体の秩序が明解である。
- ⑥農業や生活上、北海道の開拓農村に欠かせないものとなる防風林が始めて登場するのも、ケプロンやクラークなどのお雇い米人の提言を受け入れた最初の琴似屯田兵村からと言われ、その後も兵村の空間デザインの重要な要素となる。

⑦屯田兵村の計画には基準のようなものではなく、それぞれ大隊の士官や測量士が現地踏査をベースに配置プランを計画したといわれるが、地域条件に対応した巧みなサイトプランになっているのが伺える。

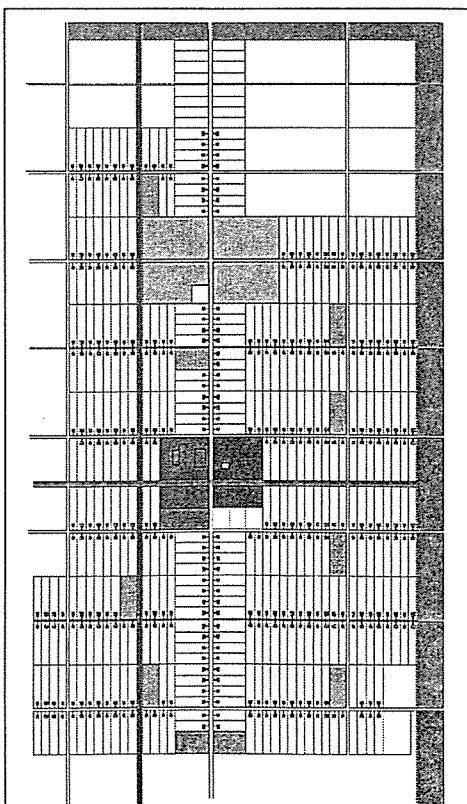
⑧地域の生活者のなかに計画的な屯田兵村という地域の計画情報がレイヤーとして重ねられており、その後の地域形成のベースになっている。



深川一巳屯田兵村と周辺



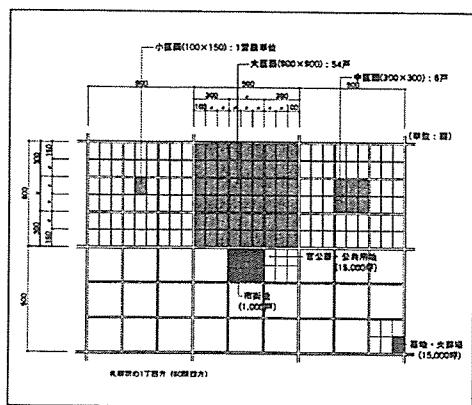
秩父別屯田兵村（防風林が兵村を囲む）



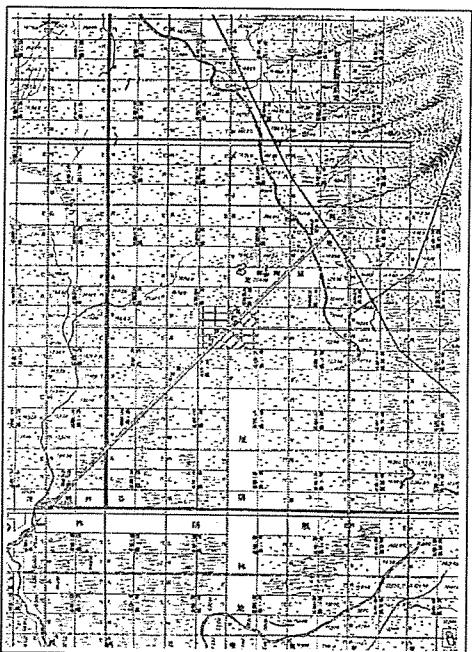
滝川屯田兵村

■区画測設の誕生

明治23（1890）年、新十津川トック原野において最初の区画則設（殖民区画ともいう）が行われた。区画則設とはアメリカ開拓におけるタウンシップ制度にならった、一種の農村の土地区画基盤整備事業であり、移住者は入植後、区画にそって独自の村落形成を行った。現在の北海道の農村地域の営農と景観の空間原理となっている大きな区画の格子状パターンによる土地区画が誕生したのである。この方法は、まず区画の基本となる地域の基線方向を定める。これは既存の道路や河川、周辺の山への軸線などによって定めるのであり、必ずしも南北や東西の軸に重なるものではない。（札幌の中心部の格子のグリッドも南北軸から5度ずれており、これは明治2年の区画決めの時点で大友堀にそって南北通りを決めたため）次に基軸にそって、300間ピッチで道路を設ける。さらに直角方向に300間間隔で道路を設ける。この300間（約545m）四方の区画（面積9万坪）が中画と呼ばれ、北海道の地域づくりの基本単位となった。いまでも農村地帯にゆけば、線状や格子状の防風林の存在でこの区画を認識することができるし、市街地でも広幅員街路などによりこの区画の存在を認識することができる。区画測設は比較的早くから開拓が進んでいた道南地域を除いて、農村から都市までカバーし、その後の北海道の地域空間の基盤となる秩序である。



区画測設の構成概念図



長沼原野殖民区画（中央の運河にそった長沼市街地）

■農村・都市計画としての区画測設

当初、区画測設には区画以外に基準はなかったが、明治29年になり農村市街地の形成まで含んだ本格的な農村計画として基準がつくられることになる。

その内容は、300間四方の区画は農地としては150間×100間の6区画に分割され、この小画（15,000坪）が、1営農単位となった。また地域としては中画9つで大画とした。1部落もしくは1村は300～500戸を1単位とし、そこには中画を60間四方の街区に区画した市街地、官公署・公共用地として1小画（15,000坪）、墓地・火葬場にも1小画、他に病院・学校、薪炭林や草刈り場や防風林もこの区画内には諸施設を配置することが決められていた。ただし、諸施設を、そのまちの中でどの様に配置するかについての規定はない。つまり都市部の区画測設は、施設のレイアウトを取り決めたものではなく、都市機能の構成要素とその大きさを示したものと理解できる。区画測設は、グリッドパターンを基本的に、そのグリッドを大小様々なに区切ることで、農地から市街地まで多様な機能に対応可能となり、それゆえ北海道の地域空間形成の最も影響力の大きい空間原理となりえたのである。



空知原野集落分布図

旭川平和通買物公園のリニューアルデザイン

大矢 二郎

JIRO OYA

北海道東海大学

芸術工学部

くらしデザイン学科

<日本初の歩行者専用道路>

北海道旭川市の駅前に日本で最初の歩行者専用道路「平和通買物公園」が造成されたのは昭和47年(1972年)。都心部に誕生した恒久的「歩行者天国」は全国の注目を浴び、その後、各都市で展開されることになる市街地活性化手法のモデルとなった。構想から造成まで7年、その間、事業の可能性を検証した「12日間の実験」など、市民的コンセンサスを得るために払われた粘り強い努力は今でも市民の語り草になっている。

しかし、その後の買物公園は、造成直後のオイルショックなども影響して、当初予定されていた整備事業が滞り、老朽化したアーケードは撤去されたものの、歩・車道の段差がいつまでも解消されないなど、快適な都市空間を実感するには程遠い状況が続いていた。

<リニューアルへの動き>

造成から10年余り経た84年、沿道の商業者から現状打開への動きが始まった。10月、偶々、筆者が地元紙に寄稿した平和通に関する発言が契機になり、商店主たち有志が集まって意見を交える会が催された。会の意見をまとめた「A VIEW OF THE RENEWAL」の内容は平和通商店街振興組合でも了承され、その後の計画策定作業の下敷きとなる。86年に定めた旭川市の新総合開発計画基本構想の中でも「都市空間を、木とぬくもりを生かした、ゆとりと魅力あるものに育て、冬の寒さと雪を活用した、北国にふさわしい、自然と共生する都市づくり」がうたわれたが、その趣旨は平和通のリニューアルに生かされたといえる。

88年、振興組合を中心に、旭川市、北海道上川支庁、商工会議所、地元大学が参画する平和通リフレッシュ委員会を組織、88年の「魅力ある平和通を創造するための基本構想」に続いて、89年、「同・基本計画」を策定、ハード・ソフト両面からの事業課題を探った。更に91年3月にまとめられた買物公園活性化協議会による基本計画では、街路整備、個店活性化計画と共に各種事業計画が詳細に検討された。

市民的なコンセンサスを醸成し路面整備の着工に到るまでにはなお曲折を経たが、漸く98年に8条平和通側から工事が始まり、今年3月、一応の竣工をみた。リニューアルの構想が企てられてから実現まで実に19年を要したことになる。だがその間、通りのデザインコンセプトに関しては、繰り返し確認しながらも一貫した理念が堅持された。

<店舗(みせ)のデザイン>

路面整備に伴い、沿道の店舗デザインに関しても基本的なポリシーを通そうと、商店街では自主的な「買物公園まちづくり協定」を策定した。店舗を新築・増改築する際、協定に示されたデザイン・コードに準拠することで、時間をかけても、通りの景観を少しづつ整えてゆこうとする趣旨である。

個性的でありながら一定の統一感をもつ街並みを創出するために、以下のようなガイドラインを掲げた。

- ①建物のスカイラインの表情を豊かにする。
- ②1階の壁面は、店の個性を表現する媒体として、多様で個性的なデザインを基本とする。
- ③2階以上の壁面は小割り窓を基本とした統一感のある街並みを生み出す。
- ④看板は建物デザインとの調和を考慮しつつ、店の個性を表現したものとする。
- ⑤建物壁面や公開空地を草花で飾る。
- ⑥街角建築は、街のランドマーク(目印)としてのシンボル性を考慮したデザインとする。
- ⑦まち全体がアート感覚に溢れた景観演出を行う。

<路面(みち)のデザイン>

30年前の造成時に基本設計を担った京都大学の上田篤氏が当初から指摘していたことだが(「旭川になぜ広場が出来たか」-建築文化'72年9月号)、ここに求められるのは「公園」なのか「広場」なのかという基本的な問題が再三議論された。

公園と捉えると、いきおい原色のベンチやプラスチックの遊具施設などが路上に並ぶ、子供を照準に据えたデザインになる。一方、広場は、欧米の街路に見られるごとく、一般的に「大人の空間」として設えられる。都心のメインストリートである平和通には後者の性格を持たせたいというのが早くから我々の共通認識であった。

長さ1kmの直線道路はそれだけで単調との意見もかねてからあって、それがブロックごとに異なるデザインを誘発していた。しかし今回は、「直線性」こそ通りの個性だと考え、むしろその性格を強調する手法を探った。2列に植えた街路樹(シナノキ科オオボダイジュ)、低め(高さ3.6m)の街灯、石による斜め格子状路面パターンを通りの全長にわたり一貫した。樹木が生育すれば、連続する緑の天蓋が壯観を呈してくれるはずだ。

買物公園には以前から佐藤忠良や加藤顕清等の彫刻が多く設置されていた。これらも

設置場所や設置方法を改めて検討した。これまで高い台座上の彫刻を見上げる形が多くたが、歩行者に親しみやすくしようと出来るだけ路面近くに設置する方針をとった。

その他のストリートファニチャーに関しては、必要最小限の配置に止めた。これまで個人や団体からの寄贈を含む様々なモノが路面を埋め、それが景観に雑然とした印象を与えていたことへの反省からである。

<雪も街の景観要素>

旭川では例年11月には初雪が降り、4月になっても残雪を見る。市が負担する年間の除雪費用は20億円にも上る。

道路のデザインにおいて雪をどう処理するかは重要なポイントになる。冬期、気温が氷点下10度を下回る日が何日もある旭川では、北陸や東北の町などに見られる流水による融雪設備は使えない。幅員20mの平和通全面にロードヒーティングを施すという選択肢もあったが、結果は両側4mをヒーティング、中央部12mはこまめに除雪することとし

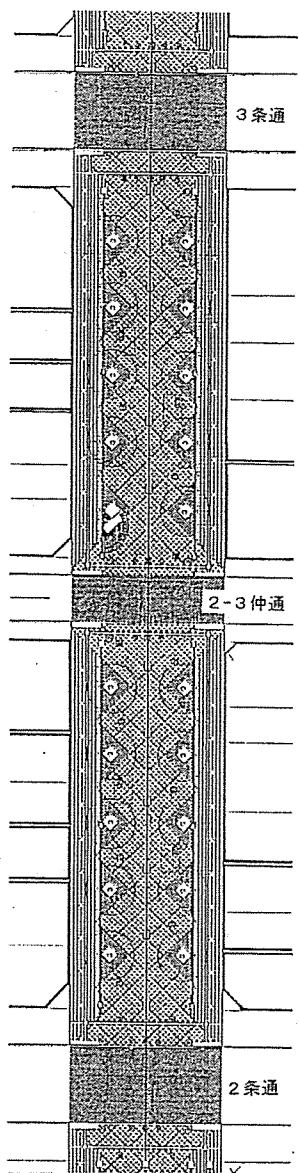
た。エネルギーを使って力ずくで雪を融かす方法は資源や環境的見地から見れば望ましくない。とかくマイナス要素と見られがちな雪も、北国の季節感を醸し出す景観資源として見直すべきだ。今冬、平和通の街路樹にもイルミネーションが施されたが、路面の雪に明かりが映えて美しかったし、2月の氷彫刻世界大会の会場として使われた際も、やはり雪面が興趣を盛り上げていた。よく踏み固められた雪面は案外歩きやすいことも事実で、冬でもあえて道路中央部を歩く人は少なくない。

<地域の大学との連携>

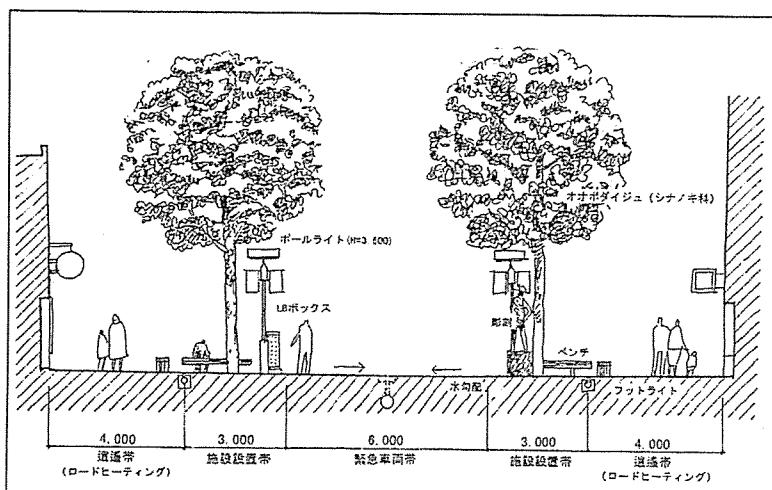
旭川には現在、4つの大学と1つの高専がある。私が勤務する北海道東海大学芸術工学部は77年に開学したが、前身の東海大学工芸短期大学設立は買物公園誕生と同じ年(72年)であった。買物公園も大学誘致も時の市長・五十嵐広三氏の構想に依るものだから、時を同じくするのは不思議ではない。



新装なった旭川平和通買い物公園（3条付近）



新しい平和通買物公園の
路面パターン



買物公園断面図

芸術工学部には建築学科があった（今年「くらしデザイン学科」に改組）ので、特に建築・都市計画に関わる分野での産・官・学連携は当初から密実なものがあった。

前述した84年の買物公園に関する意見交換会以来、リニューアルに向けての様々な場面に大学も参加してきた。私がリフレッシュ委員会や活性化協議会のメンバーとして参画しただけでなく、89年から3年間、連続して「買物公園リニューアル計画」をゼミのテーマに掲げ、延べ20名の学生と共に具体的な計画提案を行った。旭川駅から8条まで約1kmの通りを縮尺300分の1の模型にし、市内のデパートで開かれた卒業研究作品展に出品、市民の縦覧に供した。

学生が自らの構想を自分たちが日々生活するまちに投げかけ、市民の反応を聞き、部分的にでも提案が実現するところを見る（卒業後の話だが）という体験は大変貴重であったと思う。

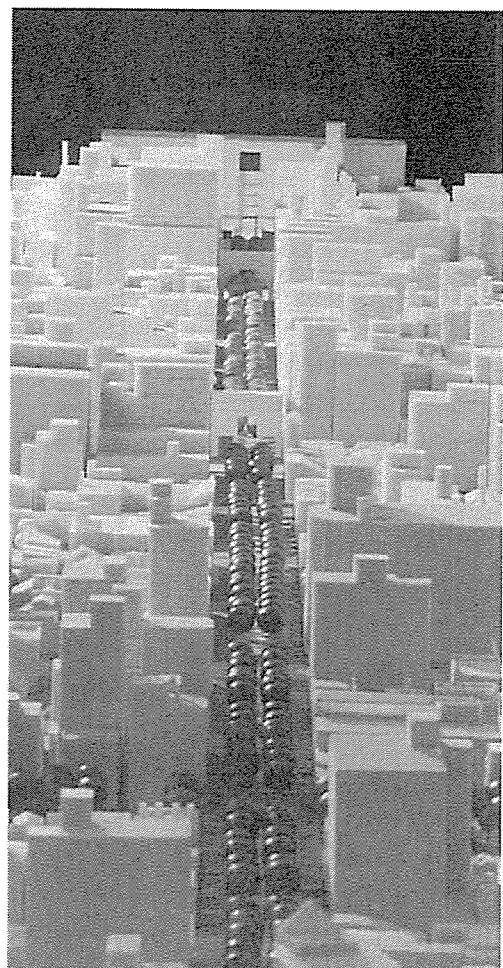
<デザインへの市民参加>

作今、ワークショップなどを通じて、一般市民が直接まちづくりに参加する事例は多い。勿論、買物公園の場合も、計画策定段階から様々な形での市民参加が図られた。

実は路面の改修工事が始まってからも、「青空集会」や「市民フォーラム」という名でデザインに関する意見交換が続けられた。工事は街の北側（8条側）から着手したが、一部が完成した段階でデザインそのものの見直しが行われたのである。

一番大きな変更は、緊急車両帯のペイヴメントを舗石ブロックから御影石にしたことである。計画案では本石を使用すべきことが強調されていたが、実施の段階でコスト上の理由からブロックになっていた。だが、やはり本物の石にこだわりたいという多くの意見に市長も仕様変更の決断をした。本来は設計段階で十分吟味しておくべきことだったが、結果としてこの判断は正しかったと私は思っている。

かくして、5丁目と6丁目を境に路面中央部の素材が変わってしまった。その他、街灯やボラードなどのデザインに軽微な変更が加えられたが、34年前の「実験」を想起させる事件ではあった。事前にコンセンサスを得る努力が不足していたことは反省すべきだが、こうしたデザインプロセスにおける「直接民主制」は旭川という街のスケールやまちづくりへの市民の高い参加意識がもたらしたものと言えなくもない。



リニューアル提案模型（大矢研究室）

<今後の課題>

①交通ネットワークの再編

買物公園開設当初から問題にされていたことだが、平和通を約50m毎に分断する本通、仲通の車輌交通は、通りが眞の意味で歩行者空間になるのを妨げている。ウィーンやミュンヘン、コペンハーゲンなどに見るショッピングモールがヒューマンな雰囲気に溢れているのは、道路の線形が有機的に曲がっている、沿道建物のスケールと道幅とのバランスがとれていることもあるが、何より道路網の歩車分離が徹底していることによる。

平和通も今後、せめて日曜・祝日だけでも横断する車輌の規制を行いたい。まず、仲通のいくつかを対象に実験し、効果を検証した上で徐々に地域を拡大すればよい。

②放置自転車問題

強制撤去される積雪期を除き、特に駅に近い路上は幅3mの施設帯が駐輪自転車で埋まっている。平和通に直交する道路沿いの駐輪設備を充実させ、更に進行中の駅周辺開発の一環として本格的な駐輪場の整備が望まれるところだ。

③環境整備・メンテナンス

快適な都市空間を維持するには不断のメンテナンスが欠かせない。冬期間の除雪や落ち葉の清掃などを行政機関の対応だけに任せ、沿道商店や歩行者自身が美しい道の創出に手を貸し、意を配りたい。空き缶や吸殻のポイ捨てやガムの吐き捨ては相変わらずなくならないが、辛抱強くそれらに対処することが肝心だ。

大切なことは、市民がこの通りを大いに活用すること。6月のリニューアル・オープン祭には大道芸人たちのパフォーマンスに黒山の人だかりができた。パレードが祝祭気分を盛り上げる機会も増えよう。緑陰を利用したオープンカフェの開店を期待するには、もう少し街路樹の成長を待たねばなるまいが、ぜひ実現させたい。

「モールとは緑陰遊歩道のことです。今は小さいが、植えられた菩提樹が大きく葉を茂らせたらきっと素晴らしい通りになる。」視察にみえた上田篤先生の感想である。



新しい買物公園で大道芸を親しむ市民

旭川のまちづくり

大野 仰一

OHNO KOUICHI

北海道東海大学

芸術工学部

くらしデザイン学科

・旭川のあらまし

北海道の中央部、上川盆地は大雪山連峰の西側の麓に拡がり、石狩川上流域の主要河川が合流する位置に旭川市街地が形成されている。年間の寒暖差 60 度近いと言われながら、近年は暖冬冷夏が著しい。北海道北部地域の政経拠点都市で、人口約 36 万人の街である。交通、教育文化、医療福祉など社会基盤は整い、渡り鳥の編隊が住宅地の上を往く程の身近な自然に恵まれる。

・最近のまちづくり計画

総合計画(第 6 次)は平成 8 年に作られ、今はおおむね 10 年の後段にあたる。以下に主なまちづくり計画の、特に特徴を表す部分を紹介する。

<緑の基本計画>平成 9 年

地勢植生上の特徴は、里山となっている盆地のエッジが市街地の南西側半分を囲み豊富な河畔緑地を持つ 4 本の河川が北西側半分の農村地域から流れ込むという構図だ。河川は大きな自然の財産であり、それぞれを緑地で繋ぎ更に里山に結ぶ事で、市街地を取り囲む環状のグリーンベルトが形成できる。都市に緑の骨格を作るという計画。

<中心市街地活性化基本計画>平成 12 年

河川に沿った JR 旭川駅を南端中心として北側東西に拡がる旧市街地(約 400ha)を区域としている。都心の空洞化に歯止めをかけ、魅力を増す目的だ。起爆剤は南北に並行する歩行者専用道路(平和通り買物公園と銀座仲見世通り)と、JR 車両基地跡地利用(北彩都あさひかわ)だ。秩序だった開拓以来の都市の基準格子(60 間角の道路網)の中に、如何に賑わいと回遊性を持ち込むか、合わせて都心居住の推進が鍵だ。

<都市計画マスターplan>平成 13 年

抽象的な言い回しとなるが、成熟した都市像を描きつつ、メリハリをつけて、都市全体と地域別の整備目標と基本方針をたてた。今や人口増でどんどんと街が拡大する時代は終わり、市街地の輪郭を明確にしながら街なかの充実(熟成)を計る時だ。市街地と農用地の間に、かつて、無原則な膨張を止める為に環状に設定された市街化調整区域は、緑の基本計画で示されたグリーンベルトとほぼ重なり、そのワイスユースを検討する時とも言える。

<景観づくり基本計画>平成 15 年

景観条例(平成 14 年)の施行を受けて目下策定中の計画。昭和 59 年に纏められた都市景観調査が出発点となり、足掛け約 20 年の息の長い様々な研究蓄積を背景にしている。人々の普段の暮らしからの視点に立って、街に対する愛着と誇りを加速させよう

とする点に特徴がある。

・中心市街地の様子

JR 旭川駅に降り立つと、真正面に国内で初めて作られた歩行者専用道路(平和通り買物公園)が約 1 km 延びるのが目に入る。建設後 31 年の今年、全面的にリニューアルされた。現在は通りに面する 2 つの地区で再開発の気運が高まり、1 つは低層部を若者向けの飲食中心テナントとし上層部に高齢者向けの居住機能を持つ施設が着工している。この間のいきさつや、デザインについては別項を御参照頂きたい。

ここでは、もう一方の歩行者専用道路周辺のまちづくりと、大型の未利用地再開発についてその概略を紹介する。

<銀座仲見世通り商店街>

この地区は旭川市民の庶民的な台所という性格を持つ。市内には古くから廉売市場と呼ばれた中廊下型対面販売で生鮮食料品や日常雑貨を扱う施設が数多く点在した。しかし、今や賑わいのある市場街は市内で唯一この地区に残るのみだ。そこに歩行者専用道路(昭和 53 年完成、幅 20m, 約 400m)が作られ、一昨年全面改修がされた。この改修をきっかけに郊外大型店との棲み分け、店主の高齢化と後継者不足、客層の高齢化、沿道建物の老朽化、空地空店舗対策や再開発、などなど諸問題が一気に顕在化した。そこで、様々な問題を総合的に検討する場が作られた。例えば、行政担当者、設計者、商店主、まちづくり専門家、それに施工者など、いわば起案者から作り使う人達を網羅した場を設けたところに特徴がある。

地先の道路が綺麗になるだけで商売繁盛はしない。空地対策では期間限定 3 年の屋台村のような仮設店舗群が開店し、路面店を抱えながら都心居住を念頭に置いた再開発の話題がおこるなど、線の整備が起爆剤となって面の整備へと移行しつつある。

<北彩都あさひかわ>

中心市街と河川に挟まれた旧国鉄車両基地跡地(約 86ha)の大開発。中心市街が自然豊かな河川を取り込みながら地区の都心的土地区画整理事業とも緊密な関係を作る為に、鉄道高架をし、都心全体の充実を計ろうとするものである。河川の持つ多様な自然が触手を伸ばすように都心に滲みだすというコンセプトは、ボーダレスに線から面へと密度を上げる現代の「共生」という考え方を具現化するものとして期待される。予定期限は平成 26 年。

リニューアルの歩み

中東 正明

NAKAHIGASHI

MASAAKI

旭川平和通商店街振興組合

事務局長

<路面再整備までの道のり>

昭和47年、それまで国道であった道路を歩行者専用道路として整備し、我が国初の買物公園として華々しくオープンしたが、その後の車社会の発展に伴い環状線を始めとする道路網の整備や郊外型大型SC及びロードサイドショップ等の出店により、通行量も昭和52年をピークに徐々に減少傾向へと進む。

<自らの手で活性化計画づくり 平和通りフレッシュ委員会>

旭川市の中心部は碁盤の目のような構造で、買物公園はJR旭川駅を降りて直ぐに東西に走る宮下通を起点に北側に延びており、1条通・2条通と交差しながら8条通までの約1kmの通であって、中間に位置する4条通（国道）を境に駅に向かって南側ゾーン、北側の8条通に向かって北側ゾーンとなる。

昭和50年代前半からその北側ゾーンでは空店舗・空地が目立ちはじめ、4条通を挟んで南側ゾーンと北側ゾーンでの南北格差が顕著となる。

昭和61年、商店街内部に「平和通りフレッシュ委員会」を設置して検討を開始するが、アイデアの羅列に終始し方向性さへ定まらない状態が続く。

昭和62年、若手経営者を中心にワーキンググループを組織し、「魅力ある平和通りを目指すための基本構想計画」を策定する。

翌年の昭和63年には、基本構想計画を基に「魅力ある平和通りを目指すための基本計画」、平成元年「魅力ある平和通りを目指すための基本計画Prat-2」を策定する。

しかし、商店街内部には買物公園化が北側の衰退を招いたとして、買物公園を前提とした再整備に異を唱える者や、商店街側はまとまらないだろうとの行政の冷ややかな対応等、買物公園の再整備は難しいという雰囲気が大多数であった。

<Officialなテーブル 買物公園活性化協議会>

平成2年、このまま商店街内部で検討を重ねても、実現化へ向けて進むためには行政の力が必要であったが、商店街側が一枚岩になりきれないため、行政にはなかなかテーブルに付いてもらへなく、そこで商工会議所に要請をし、商工会議所の主導で「旭川平和通り買物公園活性化協議会」を設置して、行政や市民代表等が加わり本格的な買物公園活性化計画づくりに着手、平成3年3月に「平和通り買物公園活性化基本計画」としてまとめ上げた。

<その後の計画づくりが・・・>

「平和通り買物公園活性化基本計画」が策定され、その後は「基本設計」、「実施計画・設計」へと進んでいくと思っていたところ、市から「今後はそれぞれの事業主体で事業化にあたる。」との発言があり、そのため各課題についてトータルでの検討が出来なく、商店街が市の関係部局間との調整及び個別打合せをおこなわなければならない事態に陥り、次の段階へとなかなか進めない時期を迎える。

この様な中、建設省（現国土交通省）の補助金を得て、魅力ある街並み形成を図るために「買物公園まちづくりデザイン推進協議会」を組織し「買物公園まちなみ協定」を制定すると共に、「魅力ある平和通りを目指すための基本計画」で示されたソフト事業（ポイントカード、駐車場共同利用）の導入を図る等をして、実現化へ向けた動きが中断しないよう活動をおこなってきた。

<歩みは遅くとも>

平成7年、街路事業（歩行者専用道路）として都市計画決定（昭和47年の整備は、市と商店街の単独事業であったので、運用方法だけを歩行者専用道路としておこなっていた）がおり、平成9年には街路事業の認可がおりた。

<待望の工事着工>

平成10年から5ヵ年事業でついに待望の工事が旭川市によって開始となつたが、今までの買物公園に対する様々な人達の思いや、また現状に不満があつても、それが全て新しく変わるということへの不安さから一部完成したブロックに対する批判が出たが、全16ブロックの工事が本年3月に完了し、6月におこなったオープン記念イベントには2日間で23万5千人の人が集まり近年にない賑わいが通りを埋め尽くした。

<中心市街地活性化計画>

旭川市の中心市街地活性化基本計画は、平成12年3月に策定され、若干遅れて商工会議所がTMOとして認定を受けている。

平成15年2月改訂版基本計画には、市街地の整備改善事業として42事業、商業等の活性化事業が22事業掲載されており、同時期改訂のTMO構想ではこのうちの18事業が計画されている。

買物公園においても、路面再整備は終了したが、市内唯一の広域商店街として市内はもとより周辺市町村民・消費者の高次な消費・文化ニーズはどう応えていくかが課題で

あり、また南北格差是正のために北側ゾーンへの魅力ある集客核施設の開発を目指さなければならない。

<南北格差是正へ>

北側ゾーンとなる5条通で、数年前に7店舗のうち4店舗が火災で焼失し、そのままの状態で放置されていたため、市民からの苦情や、折角通りが再整備され綺麗になってもイメージダウンに繋がるとして、商店街が市や商工会議所と会合を重ねる中、南北格差は正のためにあの街区を再開発して魅力ある店舗を誘致出来ないだろうかと動き出した。

<まちづくり会社によるテナントミックス>

デベロッパーも見つかり、国土交通省の補助事業である高齢者優良賃貸住宅（9階建）での事業が計画されるが、1～2階部分

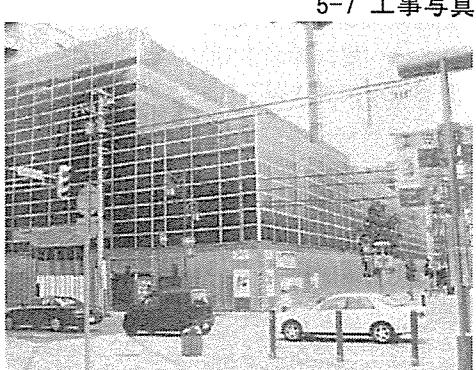
(1,708 m²)へのテナント誘致が困難とのデベロッパーの見解を受け、商店街から市・TMOとなっている会議所へ協力要請をおこない、まちづくり会社を設立して経済産業省のリノベーション補助金を活用してテナントミックスに資する店舗の取得事業に望みを託すことになった。

<食をテーマに>

当初は市民が活用できる多目的ホールを核とした複合施設を計画したが、採算性での問題が残るとして、最終的には買物公園活性化基本計画策定中に市民を対象に調査したアンケート結果から、楽しく食事ができる所を望んでいる人が多いというデーターと周辺環境から、食をテーマとしたテナントミックス取得事業に、本年7月17日に設立した旭川まちづくり株式会社にて取り組んでいる。



5-7 イメージ図



十勝の新しい風景を求めて

岩田 英来
IWATA EIRAI
象設計集団

開拓の歴史のなかで

いわゆる北海道らしい風景というのは、農村部で見られるグリッドパターンの農地と防風林、赤い屋根のサイロとマンサード、広大な牧草地、真っ直ぐな道路などこれらの景観要素の集積が固有のランドスケープを形成し、北海道らしい景観を形成している。

その土地の風景が形成される（意味をもつ）には、村や町とが生活（文化や風土）とより密接にかかわってきたかによる。

先住民族のアイヌは、狩猟・漁獲を基本とした必要最低限の生活であり、あるがままの自然界に神（カムイ）と人間が対等に共存する生き方をした。一方、明治の開拓の歴史の中で、それまでの日本古来の生活様式見直しや西洋技術の導入などで、北海道特有の社会背景と自然環境下で新たな風土性を構築する過程であった。しかし、北海道の風景が他都道府県のそれと大きく異なるのは、わずか100年余りの開拓の歴史に凝縮されたなかでの固有の風土性だからである。



写真1 十勝平野

残された風景

この凝縮された時間のなかで、固有の北海道らしい風景が形成されたのに対し、一方では、近年の人々の生活様式は情報や技術の進歩により加速度的に均質化され、消費してゆく生活「すまい」を歩まざるを得なくなった。この北海道らしい景観には、かつての開拓使による「殖民区画」のグリッドパターンとそこで苦闘していった開拓生活から構築された北海道らしさを表層する風景だけが残された。

帯広市の西に位置する工業団地は、建設・土木会社、家具工場、自動車修理工場などの中小企業が集約している。この工業用地の総面積は約 36.5ha で内半数の 14ha は保留地となっている。工業団地の中央を横切る産業道路は並木を施し「公害のない緑の工場公園」として新規企業の誘致をおこなっている。建築計画上住宅や飲食・物販店並びに文化・娯楽施設などは計画できないため、一般の人々

がよほどのことでない限りここに訪れる機会はない。また、交通手段が車のみと限定されているため休日ともなると人通りは皆無に等しい。街中心部やこの工業団地での「殖民区画」は近年の発展とともに場あたり的な予算消化のための都市計画によりその意味を次第に無くしてしまった。

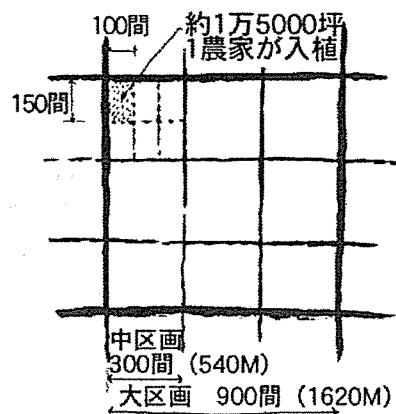


図1 殖民区画

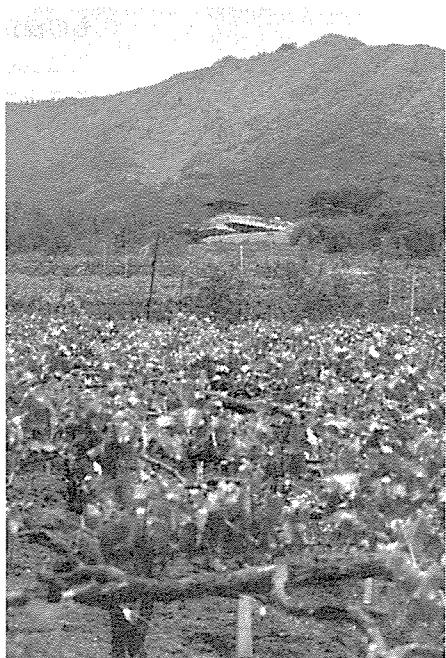


写真2 山梨県牧町・山肌に広がるブドウ畠



写真3 インドネシア・棚田

高橋建設でのこころみ

一辺が約100m×100m、残された風景のなかで、私たちはここにちいさな森（公園）をつくることにした。建物の屋根は小さく緩やかな緑の丘と連続し、周りに沢山の木々や山野草が育っている。

大きな池はゆったりとした流れをもつ。

高橋建設は帯広の農業土木の会社である。社屋の建て替えにおいて高野ランドスケープが高橋建設の社員と1995年から96年の初期計画段階で、とワークショップを行なった。そのなかで各自がどのような社屋を望むのか、また、「十勝」らしさと、土木の建設会社が進むべき道を表現することが課題となつた。

土木建設業は特に北海道のその歴史のなかで、自然を切り開く役割を担ってきた。ある意味でそれは自然崩壊の矢先でもあった。これからは自然環境とどう共生できるかが社屋の立て替える大きなテーマとなつた。

かつての土地の記憶を

その昔、この地（十勝）が内湾から河へ幾万年の時を経て、さらに河川は幾度もの浸食を繰り返してしていった。それは100年余りの歴史をさらにさかのぼることで、ここに新たな記憶がよみがえた。

社屋本体は脇役であくまでも森が主役である。ここではかつてあったであろう土地の記憶を求め、十勝の自然環境を再現するのをテーマに、日高山脈の麓の自然形態や植生をつくりだすこととした。山野草については、植生にあった自生種を山などで探し、その表土ごと採取し移植した。また、敷地の外周は必要最低限

の垣根を施している。この社屋（土地の記憶）が十勝において特異な存在としてではなく、あらたな北海道らしい風景の形成として記憶を刻んでゆくであろう。

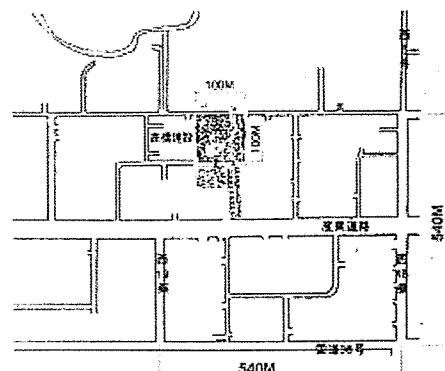


図2 工業団地と高橋建設敷地

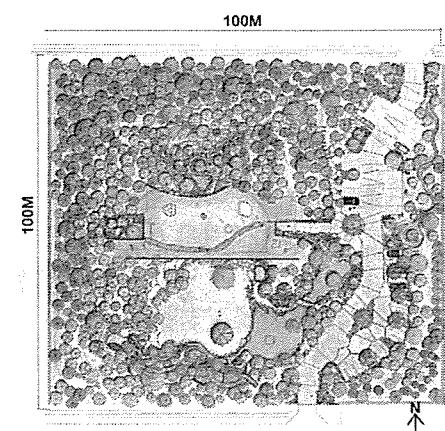


図3 高橋建設配置図



写真6 高橋建設内観

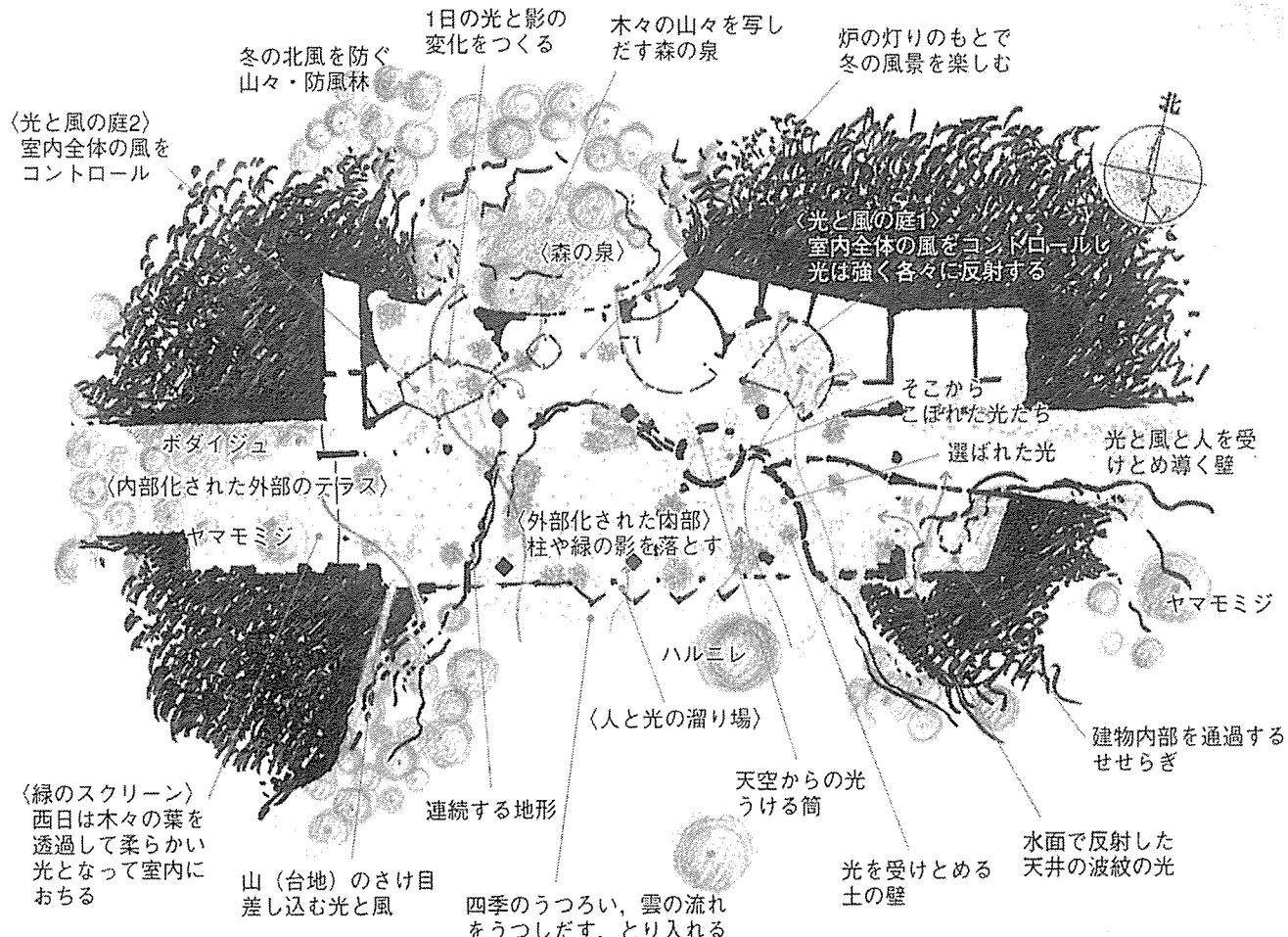


図4 高橋建設平面図

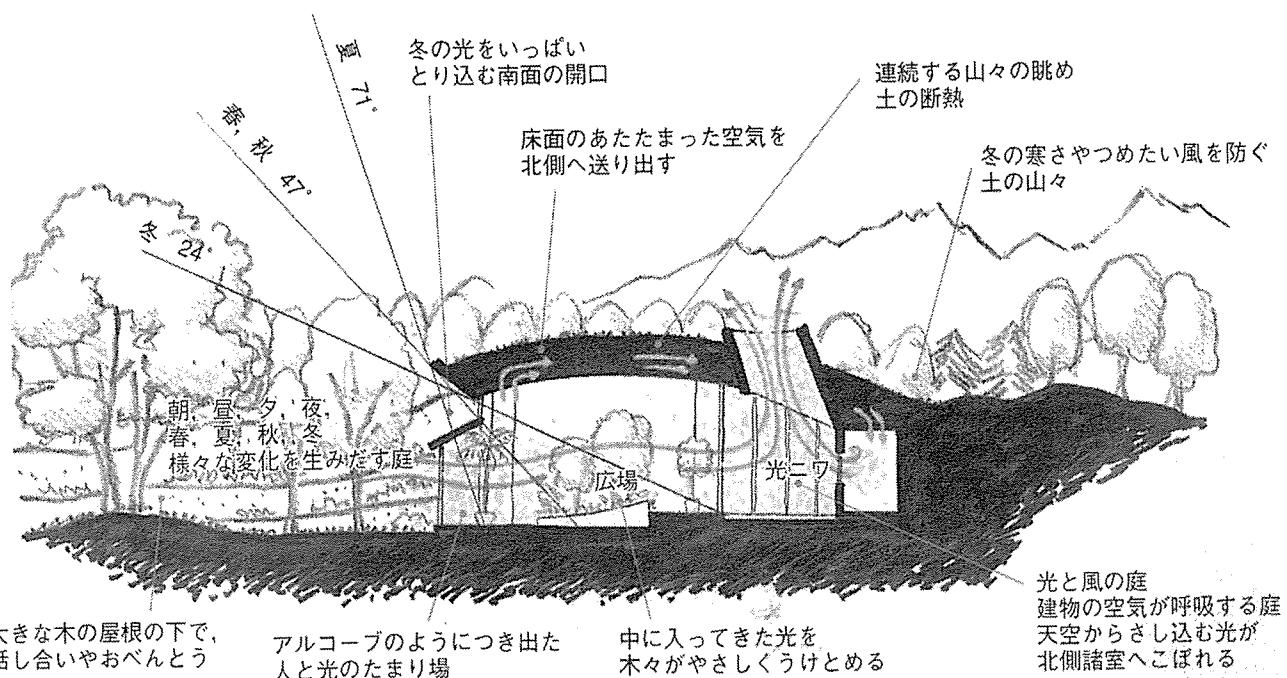


図5 高橋建設断面図



写真4 高橋建設外構 (撮影:北田英治)

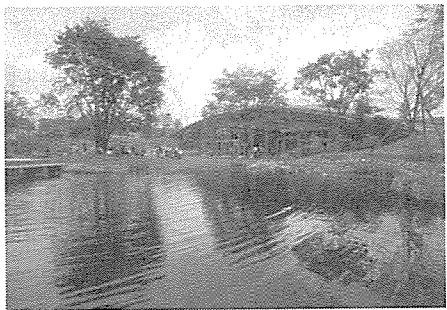


写真5 高橋建設外構 (撮影:北田英治)

- ・森だから棚もフェンスもない
- ・だから郵便屋がここを通り抜ける
- ・公園だから、だれかが石に腰掛けて、本を読んでいる
- ・公園だから、こどもが丘を登っている
- ・たくさんの木と水があるから鳥や虫が飛んでくる

【街の中に森をつくる】

殖民区画グリッド (100m × 100m) の残る工業団地という均質な街並みの中に、十勝の植生に則した森をつくる。十勝の自然環境の再現である。

エゾマツ、トドマツ、カシワ、ミズナラ、ナナカマド、ヤチダモ……。敷地は針広混交林（針葉樹と広葉樹の混じった林）、夏緑広葉樹林（落葉広葉樹の林）、湿生林（水辺など湿地の林）の3つの森と東西南北4つの庭で構成している。山野草については、自生種を山などで探し出し、表土ごと採取してそのまま移植している。

平地～丘～山、森や水辺……変化のある地形、多様な植生で構成されたこの場所は散策を楽しみに、または憩いのために、近くで働く人々が気軽にやって来たり、休日でも子供と一緒に来ることができる。垣根やフェンスなど敷地を囲うものは何もない。

建物は土の中。夏は緑の山、冬は雪に埋もれて厳しい寒さに耐え、建物の姿は自然に溶け込む

【十勝の風土を受けとめる】

冬一太陽高度の低い十勝では、太陽が部屋の奥まで差し込む。冬の日照率も全国的に見ても非常に高い。南側におおきく

く開いた開口部からはいる日光を床に蓄熱する。熱は内部を循環し、やわらかく部屋を暖める。凍るような北風からは、北側の土の山々や木々が守ってくれる。

夏一空に開けた光庭からは光や涼しい風や川の流れの水音が降りてくる。暑ければ窓を開ける。心地よい風が内部を通り抜ける。夏の爽やかな気候の十勝でさえ、その自然な動作が忘れられてきている。内部の2つの光と風の庭は室内全体の風をコントロールし、北側諸室に光を取り込む。

東西南北それぞれの庭に向けて室内は四方に抜けている。テラスや開口部からは自由に入出しができ、内部から外へと連続していく。周りにある森を部屋の延長として使って欲しいし、光や風と共に人も気軽に内と外を行き来して欲しいからだ。

【社屋としての機能を超えた多様性を持つ】

高橋建設の業務形態は過半数の人が現場管理に出て働いており、日中社屋で働く人数が少ないのが特徴だ。現場の人のスペースを社屋の中心となる広場とし、固定席にせず机をオープンにすること、各室の間仕切りを最小限とした大屋根空間にすることにより様々な形での室内的利用が可能となった。社屋で働く人々が一体感を感じながら、働く場としてだけでなく、社内行事やパーティーや社員の結婚式まで、様々な使い方を楽しんでいる。また場所ごとに素材・色・形など空間に特徴をつけ、変化に富んだ室内空間となっている。長い時間室内で過ごす人々が、朝から夕方までの光のうつろいや季節ごとの変化を楽しめる空間だ。冬には地上から全ての色が消え、白一色となるこの場所でも室内は光や緑や色にあふれている。

高橋建設概要

設計者	- 外構植栽：高野ランドスケープ・プランニング 建築：象設計集団
施工者	- 外構植栽：高橋建設 建築：ネクサス（旧名：曾根建設工業）
施工期間	- 1997年7月～98年10月

参考文献：日本建築学会刊 建築雑誌
1996年2月号
特集 北海道の建築 文化的
「移植」とその現在
開拓のグリットパターンから
の考察中井和子

十勝エコロジー パークに於ける 住民参加の変遷

金清 典広
KANEKIYO NORIHIRO
高野ランドスケープ
プランニング株式会社

概要

十勝エコロジーパークは、北海道河東郡音更町の十勝川温泉付近にあって、北海道立公園 140.9ha および周辺町村による公園等をあわせた 409.8 ha の大規模公園である。

経緯

当初はサーモンパークとして、地元の商工会議所等が中心になって、創設に向けた活動を展開してきた地域主动の公園計画であった。サケをテーマとした施設が道内各所に設けられ、新たにサーモンパークを作ることに開発局はじめ道府県等も難色を示していた。それらや環境意識の高まって来た時代背景等を受けて、サケに特化した公園像から広く環境を意識したエコロジーパークへと名称を変更し、具体的な整備のイメージを検討していくこととなった。

開発局では、「十勝川ワークショップ」として、主にこの公園への要望を取りまとめためのワークショップを開催した。橋や建築施設（物産館、博物館など）の要望が多く出された。当時、十勝の観光は、釧路や知床への通り道的な色合いが強く、移動経路に止む終えず宿泊するといったスタイルが固定しており、そこに何かしら目的を持って滞在してもらうための様々な工夫を検討し始めた時期と重なる。

この頃までの地域の要望は、主に商工観光系のもので、地域住民が何を考えているのか、何を望んでいるのかについて見えにくい状況であった。同じ頃、十勝では士幌高原道路建設問題が建設中止と言う結論が出された頃でもある。開発と保全のはざまで地域も揺れていた。

地域が望む地域にとってのエコロジーパークとは何かについて、地元の住民が検討する場を作ろうということで、『現地でエコロジーパークを語る会』と言うのを立ち上げた。十勝川の中で、エコロジーパークの位置がどこにあるのか、その生態的特徴は何か、そこには何がふさわしいのかなど、具体的な議論を期待して始まった。これまでのサーモンパークに関わってきた人達を含めて興味を持つ一般市民の人達の参加も得て、実際現地を歩き、公園をどのようにしていくかが語られた。施設型の要望の他に今の環境に対する意識がもたられ、現状の環境を生かしながら何ができるだろうと言うような議論がはじめられた。しかし、そのような流れの中でも、サーモンパークへの未練は捨てがたく、また、この時期に決定された

道立サケ・マス孵化場の廃止等を受けて、サケの孵化施設への要望や、それを中心とした物産館への要望も捨てがたく、関係コンサルタントの中でも立場の違いが計画案の違いとなり、全体計画の合意形成に困難を生じた時期であった。

サケ問題の解決が見られなければ、いっさいの話し合いに応じられないと言う強行派によって、『現地でエコロジーパークを語る会』はいつの間にか十勝川のサケ遡上問題をどのようにするかを話し合う場となっていました。公園の敷地は、泥質の河床で、サケ等の孵化には適さない場所であることを確認し、地下水等の調査もを行い、水質が適さないと言うことも確認したが、公共事業に於ける対応を求められ、公園としての対応は困難であると結論は出されたものの、その問題の解決なくしては、公園等いらないと言うような議論にまで発展した。一方では、サケにこだわらず、公園への魅力を語りたい人達も存在し、その人達はサケ問題が集中的に議論される中、次第に会にも出席されなくなってきた。計画案の中に、将来の可能性としてサケの遡上可能水路を盛り込むことで、サケ問題の一応の決着を見るまでに一年以上の歳月を費やした。商工会議所や帯広サケの会の人達を中心に、全国へ視察等にもいかれていたのはこの時期である。

サケ問題が解決した後は、シマフクロウとタンチョウの話しどとった。北海道でも生息域が限定されてきているシマフクロウや釧路湿原に越冬地を持つタンチョウなどを十勝川周辺に生息環境を用意していこうとする市民団体の意見であった。

基本的にはエコロジーパークの理念を実現していく中で実現可能ないようであると考えられることであるが、タンチョウに関しては、冬の給餌が必要であり、そのような活動を市民が継続して行っていくことが出来るのであれば、不凍水面を持つ池を設けることは可能ではないか等の具体的な議論が行われた。

実践した手法

ダイナミックデザインプロセス

このような状に総合的に対処していくために、また環境を育成しながらその環境をどのように保全し活用していくのか等をダイナミックに考えていくこととで、計画に流動性を持たせた。

市民の参加を得ながら、実際に市民の人達が環境育生等の作業を通して、関わりを深めていく中で、出てくる要求（予測で

きるものではあるが、建築施設などの規模等については参加状況等を見ながら決定していく) と言う方法をとることとした。

また、事業期間10年間を有効に生かし、利用を開始した後に利用状況に応じた対応ができるようダイナミックな対応の可能な整備手法をとった。

先行利用と実験施行

実際にエコロジーパークの環境を体験してもらしながら、そこでの利用のイメージを広げてもらい、それを計画に反映させていくために、エコロジーキャンプを開催した。2泊3日のプログラムを企画し、子どもからお年寄りまで、また行政関係者およびプロジェクトに関わる様々なコンサルタントの参加も得て開催された。それまで環境の保全について要望する人と、施設への要望を持つ人はそれぞれの立場で意見を述べるにどまっていたが、実際の体験キャンプを通して、両方の視点を持って具体的な計画のイメージが語られるようになった。このキャンプの中では、参加者とともに森林整備等の育生活動とともに、現地の資源を生かした遊び場づくり等の活動も行った。そのことにより、整備される施設によって広がる世界と利用者の創意や工夫によって広げられる世界の二つの世界が広がる興味溢れるフィールドであることが確認された。

実際に実践してみることにより、関係者それぞれの頭の中でイメージされていることの違いをそれぞれ認識でき、スタートポイントとしては有効であった。参加者の人数は、当初の語る会などよりも少なくなったが、継続的な関わりが生まれ、またその後の自主的な活動展開などへつながった。

プロジェクトハウスの設置

農家の建物を改造して、プロジェクトハウスを公園施設作りに先駆けて行った。このプロジェクトとハウスが、先行利用活動の拠点となり、自然観察会や市民の自主的な活動の拠点となった。

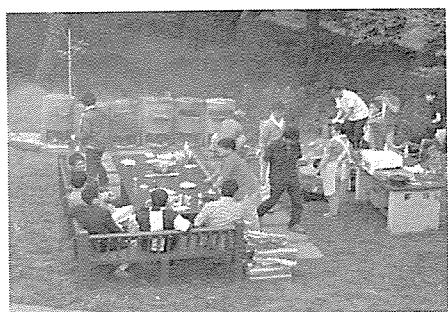
なるべく多くのエコトーンを創出するために水系の導入を行った。その水系の導入にあたっても建築施設の為の掘削により発生する粘土質の土を用いた止水を施す等、防水シートやコンクリート構造物等を極力排除し、河川管理者との協議の中で、人工的な構造を最小限のものとするように努めた。



地質調査データからは、水路などに止水を施さなければ漏水で枯れたながれになるということが計算されたが、できる限り自然の流れを再生しようという目的で、井戸の掘削を先に行い、実験的に水を流してみることとした。流水実験の結果、止水はほとんど必要なく、あわせて自然な流れの形態を確認することもでき、設計に反映した。十勝川の水はきれいに見えるのだが、停滞させるとすぐにアオコの発生が見られる。窒素やリンが多く含まれているためである。そのような水質の現状を正しく認識するためにも、公園内の小水路は機能する。

自然の營力による自然回復を積極的に活用し、環境誘導型の育成を行うエリアをもうけ、段階的に公園をオープンしていくことで、利用しながら作り上げていく公園像につながっている。

また、草刈りだけで作り出されるキャンプ場とか、間伐だけで作り出される、林内のお花畠など、ローインパクトで楽しみを作り出す工夫をこらした。



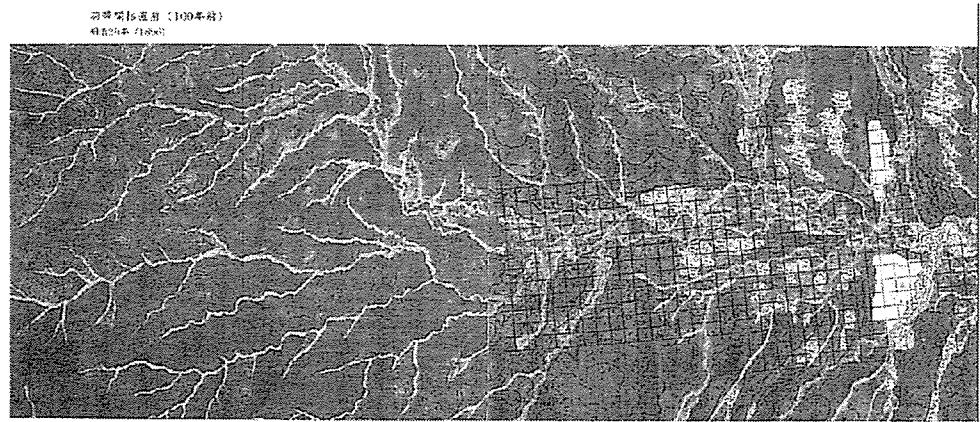
専門家の提供する情報

開拓の始まった100年前の風景はあるで違ったものであった。開拓が始まって30年ほどの間にほぼ現在の十勝の原型ができきたものと思われる。河川の状態などは人の手が入る以前とそれ以降では大きく様変わりしている。現在その当時のことをしっかり語れる人も残っていない。

地域の人が十勝の風土と思っているものは、実はこの100年あまりの中で生み出されてきたものである。人と自然の共生を目指す理念を掲げたエコロジーパークの計画において、時間をかけた自然と人の付き合いを見つけていくことも必要なことであった。

草地の維持についても、草刈りの回数や時期などを変えた実験を数年にわたって繰り返し、効率的に植物の多様性をある程度維持できるような管理の指標を得ている。

環境の保全と利用のバランス感覚は、実体験に基づいて発達するものと思われる時代背景などにとらわれず、それぞれの地域が地域それぞれのバランス感覚を早急に育てていくことが求められているように思う。環境教育などの普及啓蒙もそのようなことからおこっているものと思われるが、継続的に関わられるフィールドが不可欠になると考える。



北のデザイン雑感

土田 旭

TSUCHIDA AKIRA

広報・出版委員

株都市環境研究所

北のデザイン雑感

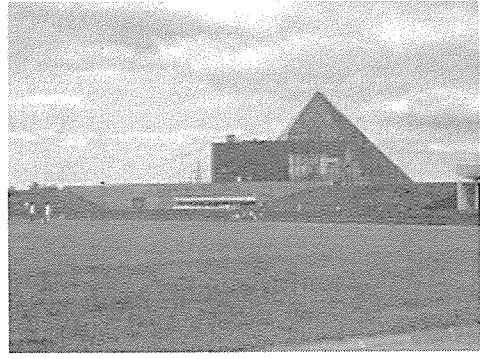
北海道の風景は昔から気になる風景だった。一般的観光客の関心とも通じていると思うが、気候がしからしめている農の風景が

「本州」と異なっていて、これを背景にする建築や都市の景観とも関係していると思うからである。畑作や酪農を中心とした農地は、水田のように水平に拘らない。水田をつくるための「棚田」や「田毎の月」は「本州」の風景である。田園、都市を問わず風景における水平の実感は、わが国の農家や社寺の伝統的形態に影響を与えたばかりでなく、日本人の空間感覚全般にも作用しているのではないかと考える。一方、北海道の緩やかにうねり広がった広大な畑あるいは牧場の風景は、開拓の歴史的経緯もあるが、スケール的にはアメリカ大陸というよりもヨーロッパ、ことにフランスやドイツの地方に近い。これらの地域の伝統的農家や集落のあり方とくらべて、果してどのような相違があるのか、景観的特徴を北海道の景観と比較する癖が身についた。

ヨーロッパのこれら地域の遠望景観は、緩やかな畑や牧草地のうねりの向うに見える教会の尖塔であり、勾配を持った集落の屋根の重なりである。この風景の中に水平は見られない。教会の塔に象徴されるように、垂直が景観を支配している。教会の塔に関しては「塔の思想—ヨーロッパ文明の鍵」（レヴェツ・アレクサンダー・マグダ著）を紹介するにとどめる。



モエレ沼公園

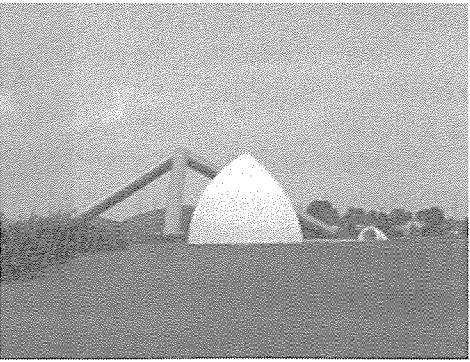


モエレ沼公園

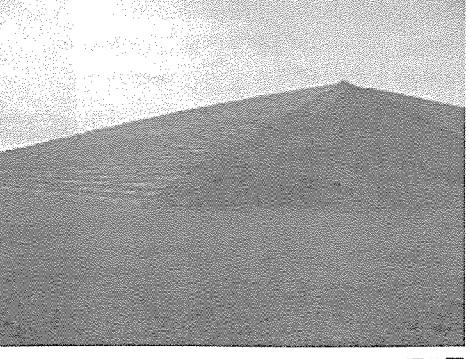
それでは北海道に同じような景観思想があるかといえばそうともいえず、北海道の田園で垂直を強調してみてもどうということもないだろう。そればかりでなく、北海道に何度か足を運ぶうち、ものごとはそう単純なものではないということが分ってきた。たとえば道南の地形は、本土の東北地方とほぼ同様であり、農業も基本的に水田耕作で農家や集落のつくりも大差ない。水田自体、近年まで米がもっとも有利な作物だったこともあるって、かなり広い範囲に普及している。ほんの一例としていえば、旭川の「男山」はなかなかの銘酒である。農の風景とは別になるが、たとえば小樽や釧路などは明治以降の土木や建築の歴史的痕跡がここかしこに残っていて、むしろこの要素による印象の方が強い。もといえば今日の都市や建築のつくられ方は、沖縄も含めて全国共通の技術・工法が普及し、地域、ことに都市の景観を味気ないものにさせている。風土に根ざしたまちづくり、デザイン的独自性はもはや望めないのでしょうか。

モエレ沼公園と十勝エコロジーパーク

昨年夏、別件で札幌を訪れたとき、地元の方に案内をお願いしてモエレ沼公園を見に行った。二年ほど前にもランドスケープ雑誌の編集者に誘われて見に行ったのだが、その時は土と石でつくられたピラミッドとその周辺しか姿を現していなかった。しかし、この作品というか、空間に惹かれるものがあり、もう一度見に行きたいということでお願いをして連れて行ってもらったの



モエレ沼公園

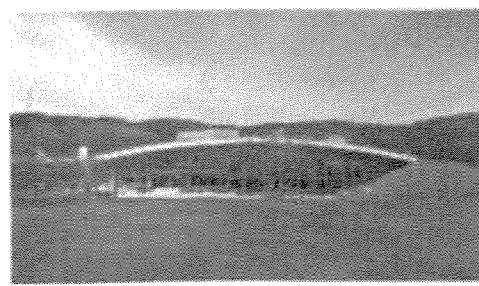


モエレ沼公園

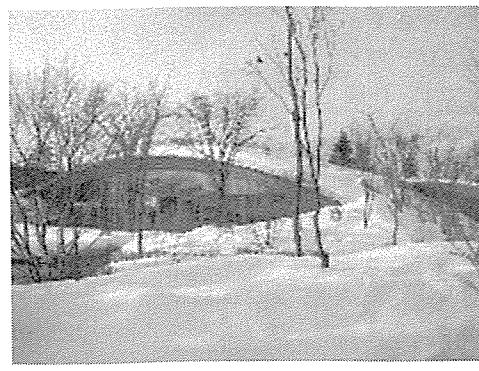
である。この公園はイサム・ノグチの最晩年の作品で、遺作というべきものである。このモレエ沼というのは清掃工場等の焼却ゴミの処分地だった場所だそうで、いずれ公園に使われることになっていた所である。沼は環濠のような形で残され、自然に近い状態で水面と水生植物があり、その内側に、イサム・ノグチのアース・アーキテクチャとパビリオンがある。壮大なエコロジー・パークでもある。作品としての詳細は他の資料にあたって欲しい。ここで述べたかった感想は、強い風のなかに展示物としての彫刻でないものを札幌に創りたいという氏の願望がよく表明されていると思うが、土盛りと草地を主体とした空間造形が、意図してか知らずか、北海道の風土にあったランドスケープデザインになっているという点である。というのも、これを日本の他の地域に持っていくても似合わないだろうし、生態的に維持できないのではないかと思うからである。

話は変って、帯広郊外、音更町内を流れる十勝川に沿って道立の十勝エコロジーパークがある。昨年第一期分がオープンしたばかりである。実は、今回訪問した音更の高野ランドスケーププランニングの計画設計によるものである。

十勝エコロジーパークは雪にほとんど埋れていたが、これには理由があって、主建物であるビジターセンターはアーチ状の屋根が地面から立上っている形をもっており、夏は芝生、冬は雪が積って周囲のオープンスペースに同化していることも働いている。



十勝エコロジーパーク



高橋建設本社

もう一棟ある土のフォーリィも同様である。このなじみ方や、地形と植生、風景の大らかさは、モレエ沼公園とはデザインポリシーを異にしつつも北海道らしさを感じさせるものであった。

北海道にもはびこりだした陸屋根の住宅・住宅地

十年以上前から津軽地域で景観を考える機会をもった。そのとき、生きしい色をした、とくに青の金属屋根が目立つことと、陸屋根形式の家屋が多く生れていることが景観を損っていることを指摘した。前者は長尺レジノ鉄板の既製品の色が限られていることと、なぜかわが国の各地に共通して青を好む人びとの多いことによる。後者は、金属板を溶接することによって屋根に雪をのせたのち融雪して水として流すという技術的進歩がもたらしたものである。雪下ろしの人手が乏しくなったことと、町なかでの敷地が狭くなりおろした雪の始末に困るということから開発された工法と思われる。これをデザインされた陸屋根とはいいたくない。北海道では雪も軽く、急勾配の屋根にして滞雪させないのが従来のやり方だった筈で、急勾配の切妻屋根は北海道らしい風景をもたらしていた。この屋根も赤や青が多かったが、他の地域の赤や青よりも救える感じがしたものだ。

きくところによると北海道でも住宅敷地は狭くなり、昔のようにはいかなくなつたのと、陸屋根の新しい工法を開発した工務店が積極的に売り込みをかけて急速に普及し



釧路市



札幌市

つつあるということである。それにしてももう少しましなデザインの住宅はつくれないものだろうか。北海道と同じような気候条件をもつ世界の各地域の住宅デザインはどうなっているのだろうか。そういえば、昔、機上からみたアンカレッジの市街地は殺風景だったという記憶があるが、案外このような陸屋根だったのだろうか。雪の北海道に来てあらためて感じたのは、雪が積った状態では屋根一面真っ白で、この状態ならば我慢ができそうだということである。

地域性のデザインと作家の独自性のデザイン

先にも触れたが帯広（音更町）で廃校になった小学校建物で各々事務所を開き活動をしている象設計集団（代表 岩田英来さん）と高野ランドスケーププランニング（代表 高野文彰さん）を訪問した。同行した広報委員の近田玲子さんは「象」の照明デザインをいくつか（も？）協力しているということである。両者の設計活動は有名であり、今回のニュースにも書いてもらっているので、計画・設計そのものについてはそちらに譲る。ここでは両者のデザインから多少展開して感じたことを述べたい。近代建築運動の一つに「土地」から解放ということがあった。その結果、根なし草の、いわゆる国際様式がはやり、その合理性というか使い易く造りやすいところから、実務的には歓迎された。今日ではますますその傾向が強まり、資本優先の建築が氾濫している。先端を行こうとしている建築家も

現代の最先端工業技術（ないしはその社会）の表象としてのデザインを意識し、その結果、どこへ行っても同じような風景が現出しだしている。当然ながら生活感覚に乏しい表情であり、風土性は意図的に避けられる。このような傾向は、地域や場所に拘ろうとする都市デザイン、景観形成と相容れない。その対極に「象」や「高野」はあると思われるが、デザイン傾向は異なるとしても、各々の地域で活動している建築家やデザイナー、プランナーの中にもそのような位置を自覚している人たちは少なくない。

建築デザインで地域主義が主張され、あつという間に表から消えて久しい（二十年近くたつか）が、都市デザインの立場からは、地域主義に今まで以上に関心を持つべきではないだろうか。そしてその中で「象」や「高野」の素朴で土着的ともいえる表現と地域性についてより深く考えることが必要と思われる。

地域性は単に地域の地理や気象、歴史などによるものののみならず、地域の活動によつても醸成される。“主義”であったり、“スクール”であったり、“傾向”であったりする。このような動きというか気配は、北海道のような土地柄に向いていそうな気もするがどうだろうか。そういうば釧路には、亡くなられたが毛綱毅曠さんが居た。「象」や「高野」のような活動へ同調するプランナーやデザイナーの輪が広がって、地域性として定着していくようなことはないのだろうか。

75号「沖縄」特集の訂正とお詫び

お知らせ

前号の特集名称が間違っていました。「ちゅむらん・びーち・ちゅむらん めーさ in 沖縄」ではなく、「ちゅらむん・びーち・ちゅらむん めーさー in 沖縄」です。沖縄の関係者並びに特集編集者の方々にご迷惑をおかけしました。ここにお詫び申し上げます。

また、75号「沖縄特集」においては、編集時に2つの原稿が編集ミスで掲載もれがありました。執筆していただいた方、読者の方には、重ねてお詫び申し上げます。ここに、特集時に掲載される予定でした2つの原稿を掲載させていただきます。

沖縄・ツーリズムの本質

長沼 真智子
NAGANUMA MATIKO
有限会社エル・グレコ

・沖縄での一ヶ月間

私は大学2年の春休みに沖縄に約一ヶ月間滞在していました。そのときの体験は、旅をするということの本当の意味を私に教えてくれた様に思いました。

・大宜味村字喜如嘉

自宅は倉敷なので那覇までは大阪から飛行機で行きました。東京から船でくる友人の平野さんを待つ間に私は母の親友で芭蕉布の工房を主宰する平良敏子さんのところへお邪魔しました。平良さんの工房は沖縄本島北部の大宜味村の喜如嘉というところにあります。静かで美しい村です。沖縄はその頃交通機関はモータリゼーションのみでしたので、バスの交通網がかなり発達していました。那覇から名護のセントラルバスステーション(ものすごく大きなバスの駅)を経て大宜味村まで確かに3時間ぐらいかかったと記憶しています。平良さんは現在国の重要無形文化財で、一時は途絶えていた「芭蕉布」を村全体の産業として復元した方です。ここに約一週間お世話になりました。

・竹富島

那覇のユースホステルで平野さんと落ち合い、石垣島から船で竹富島へ。竹富島の民宿「いづみや」に気がつくと私は三週間も滞在してしまいました(彼女はとっくに帰っていました)。この竹富島での滞在が旅をするということの本当の意味を私に教えてくれた貴重な期間となりました。

・地球が浮かんでいると感じた

夜、街灯も無く、真っ暗闇の道を通つて埠頭に出るとそこは360度満天の星空。そこに寝そべると自分自身が暗闇の中で星達に包まれ、空中にいるような感覚にとらわれます。まさに地球が星雲の中にぽつかりと浮かんでいると言う事実を実際に体感したひとときがありました。

・その他の八重山諸島

竹富島から見ると、西表島は暗いうつそうとした森の塊です。友人はその島に向かって旅立ちました。その後、東京へ帰ると言うことでした

・長期滞在で得た物

長期に滞在すると、単に観光でひとり訪れるよりも多くの事を体験します。それは単身赴任や、学生時代にその土地で生活することとも違っています。それはあくまでも外部の人間として扱われながら、その土地の人達の生活の輪に入れてもらえると言う事です。お客様でありながら、観光客には決して見せることの無い奥深くの部分を見せてくれ、観光客には出来

ない事を体験させてくれます。祭りの輪に入れてもらったり、いっしょに市場に買い物に行って、その土地独特の食材を買ったり、料理を手伝ったりします。海へ漁に出てみたことも無いような亜熱帯の美しい色彩の魚をとり、その場で料理して貝殻のお皿で食べたり、岩の間にあるうにを取り、それを割って塩水で洗い、つるりと食べたときのあのすばらしい味は決して忘れることが出来ないです。

この様に、自分自身の旅に対する考え方で大きな影響を与えた沖縄の旅でしたが、これもみな帰って行くと言う前提があつてこそその旅です。訪れる人としてのその土地での小さな発見の喜び。それは自分が「よその人」(ストレンジャー、フォリナー)であるからこそその喜びも大きいのです。

・異文化を体験する

旅をするとすることは異文化を自らがこの身で体験すると言う事。それは生まれてから今日まで身につけた文化を再確認すると言う作業にほかなりません。

・美しい島沖縄

青い海、白い砂。どんなに遠くまで沖に出ても底の底まで見とおす事が出来る透き通った青い海。テーブル珊瑚の間を泳ぎ回る名も知らぬ美しい色彩の魚たち。どこまでもどこまでも続く遠浅の白い砂浜。

沖縄の古くからの村々を訪れると、そのしっとりとした佇まいに息をのむような気持ちがします。強い風を避けるために低く押さえられた赤い家並み。暴風のために植えられたと言うびっくりするほど高さの黒々としたフクギ。このフクギから黄色の染料を取ると言う事を私は平良さんに教えてもらいました。ひっそりと息をひそめるように建つ沖縄の家を取り囲むしっかりとした土塀の間からは極彩色の花々が顔を覗かせています。何もかもが美しい島、それが沖縄なのです。

・旅をするという事

旅をするということはいざれは普段の生活に戻る、日常に戻る、現実がその先に待っていると言うことを前提にしています。だからこそこの限られた期間を目いっぱい何かになりきって楽しめる、楽しもうとしているのかもしれません。私は若い頃の沖縄での一ヶ月間の滞在により旅をすると言うことの意味をそれまでとは大きく違った意味として身につけました。それは、訪れたところが沖縄であったからこそ出来たことかもしれません。パリで、ニューヨークで、ドイツのライン川沿いの小さな町ビンゲンで、私は出来るだけ一箇所に長期で滞在すると言うことを心がけて

特集

天久開放地、転じて 那覇新都心について

堀口 浩司
HORIGUTI KOUJI
アルパック

います。その町を拠点にして移動は出来るだけ日常の交通機関を使う。そのまちの住人に仲間入りさせてもらったとき、私は自

分が旅をしているということをもう一度認識しなおすのです。

沖縄の新都市開発の今日的スポットといえば那覇新都心になる。期待が大きすぎたのか、地元の声はイマイチである。米軍用地の跡地利用モデルとしては郊外型のハンビータウン（北谷町）と、その名のとおり新都心を目指した「那覇新都心地区」が有名である。この新都心地区には我々JUDIのメンバーも何人か関わっており、都市デザインの検討、各種補助事業や地区計画など、それなりの知恵と施策が投入されている。国や公的機関の施設、大規模なショピングセンターなどがオープンしている。地方都市における都市開発地の水準から見れば、施設立地や住宅建設がハイピッチで進んでおり、外から見れば「結構イケてる」開発地である。

沖縄県や那覇市の規模（それぞれ人口135万人、31万人）の郊外市街地としては、短期間に集積が進んでいると思う。しかし、である。一部の人からは「前評判ほどではない」「期待はずれ」の声も聞こえてくる。

かつての米軍住宅地が返還されたとき、天久(あめく)開放地と呼び、なんとなくわくわくして、沖縄の新しい都市空間として期待した開発地が、現実には平べったい郊外型の店舗が多く立地した地区になってしまった。

道路や公園など公共による施設整備はかなり立派である。軍用地の跡地利用のモデルとして、その期待を一身に背負ってきたため、公共公益施設は十分に手当てされている。残る民間施設の立地と権利者による土地利用誘導には、自ずと限界がある。あちらこちらにまだ殺伐とした土地が残っているが、冷静に見れば、一気に超高層ビル街になるほどオフィス床需要がある筈もなく、住宅と飲み屋が密接に共存する沖縄らしい空間が短期間で作られることもない。薄味でなんとなく頼りない、沖縄そばのつゆのような空間である。

幹線道路の沿道には全国展開の紳士服チェーン、ファミリーレストラン、郊外型スーパーなどが最初に立地するため、今は画一的な風景が展開されるのはやむを得ない。しかし、さまざまな規模の中高層マンションが建設されているため、夜間人口の増加に伴って、地区内に個性的な飲食やサービス業が順次、立地してくる筈である。

10年もすれば、郊外型店舗の借地期間も終わり、もっと土地利用の高度化も進むはずである。時間とともに徐々に新都心らしい空間も形成される事を期待している。

遺伝子回路DNAの風景

関根 伸夫
SEKINE NOBUO
(彫刻家)
環境美術研究所代表

広大な赤い砂漠をもう三時間余りもバスで走っていた。誇りっぽいガラス越しに、僕は高温多湿の日本とは余りにも違う風景に、妙な興奮と興味を持って眺めている。

遙かなる何処までも続く砂の丘陵は、雲一つない太陽のもと赤い乾燥した砂の大地そのものである。その荒野にはイバラのような草が僅かに自生していて、ベドイン族の流浪の民はその植物を羊に食べさせては、移動して生活しているだ。次第に岩山が見え出し、それが山脈になっているのか、と観得される。

今回の旅は＜出エジプト記の逆コースツア＞という変わったツアーパーに参加した結果である。旧約聖書にモーゼがエジプトからイスラエルの民を引きつれ、砂漠のシナイ半島を彷徨し、シナイ山で十戒を神から受ける物語があるが、その逆コースである。従ってヨルダン、エルサレム、死海は既に経過し、今はアカバからシナイ半島を横切り、明日にはシナイ山に登ろうとする旅の途上にあるのだ。

山脈風の岩山を目を凝らして注視していると、あちらこちらにアブシンベルに似た神殿風なものが在るではないか。慎重に観察してもどう見ても神殿としか判断出来ない。しかしこんなところに神殿があるという地図の表記も無いわけだから、思わずガイドに質問した。＜神殿みたいなものが見えるんですが.... 神殿は無いはずですよね....＞

髭もじやな、鋭い目鼻立ちのアラブ顔したガイドが日本語で答えた。＜あれは砂漠特有の現象です。強い砂嵐で、砂が山肌を叩き、削ります。当然わずかしか削れませんが、永い間にすこしづつ削る結果が..... 岩石でも柔らかい部分と硬い部分があるため、どのように陰影を造り出します。砂嵐といつても、砂はある高さ以上には飛びませんから..... あのような神殿のように見えるんです。不思議な現象ですね....＞

なるほどと僕は納得しながらも、あの現象を日常的に見ている人々が、エジプトの神殿を造ったのだと考える方が正しいと思えた。風土特有の現象が常に日常記憶が作用して、この砂漠特有の風土に於ける、遺伝子回路DNAともいえる記憶が作用して、この砂漠特有の風土に

記憶が作用して、この砂漠特有の風土に囲まれた人々がエジプト神殿を造らせたのだ。もう1つの事例は次のような話である。ネパールの山岳地帯を抜けて、今は水田地帯に差し掛かってた。釈迦の誕生した＜ルンビニ＞を一行は目指していた。今回は釈迦が関係した仏教の遺跡を巡る旅の途上なのである。一本の国道の両端には稻作を基にする人達の家々が並んでいる。田んぼの黄金色が輝き、永遠と続く風景を懐かしいと感じるのは、僕達日本人の原風景と共に通だからなのだろうか。

よく注視していると、家々の入り口部分に、一本の木の柱を中心にして稻藁をワラボッチのように積んである。どの家の角にもそのワラボッチはあって、その家のシンボルであるかのようである。凝ったものには中心の部分がさまざまに工夫されて、まるで自分達のアイデンティティーを固持しているかのようである。その塔を中心にしてワラボッチの形態は、何処かでかなり数多く見た記憶がある..... そうだパゴダの原型なのだ、と気が付いた。

インドやネパールの寺院にしばしば見られるパゴダの形態は、稻作文化を持つワラボッチの形態であつたのだ。繰り返し見る形態が人々の遺伝子回路DNAに作用し、違和感のないシンボルとも云うべきパゴダという形態を生んだともいえる。多くのパゴダの場合、半球状のワラボッチの部分は白色に塗られているため、人々は気付きにくい。

今まで書いてきたエジプトの神殿の原型やパゴダの原型について、誰も今までふれた人はいない。そして通説となっている訳でもない。しかし私が今まで多くのモニュメントを考えてきた経験と多くの旅行を通して、多分そうに違いないと、確信出来ることである。そして素晴らしいモニュメントとはこう云つた遺伝子回路DNAに触れてくるものでなければならぬと、自責の念と共に常に考えてきたことによる。

人々の記憶が意識化できないあたりを取り出して、見事に形態化できたら。実際に気持ちがいいのだが..... と、仕事をしながら空想しているのである。

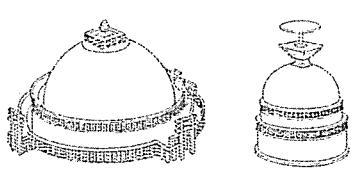


図1 パゴダ

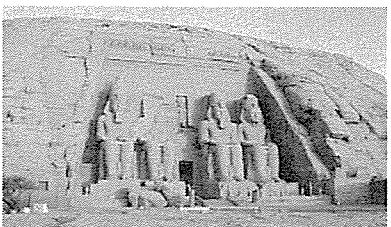


写真1 アブシンベル

1. 新会員の紹介

2004年1月1日～2月29日の入会者は下記の通りです。（入会順、敬称略）

2月29日現在の会員数は、493名です。

正会員氏名	勤務先(ブロック)
三ツ江匡弘	三ツ江環境意匠研究所(北海道)
柳原 恭順	(株)三四五建築研究所(北陸)
鈴木 裕	(株)NIPPOコーポレーション(関東)
増田 淳	千葉市役所(関東)
高原 浩之	シザーペリ&アソシエーツ・ヤパン(関西)
小松 孝	(株)緑の風景計画(関東)
小園 隆嗣	松下電工(株)(関西)

学生会員	学校名(ブロック)
三木 佳織	九州芸術工科大学(九州)

2. 退会者(2004年1～2月)

松永一生(敬称略)

3. 住所変更等(敬称略)

氏名	変更内容(新)
井上 洋司	(株)背景計画研究所 〒190-0013 立川市富士見町3-15-20 Tel. 042-540-2061 Fax. 540-2062
須永 沙子	(株)TALO都市企画 〒135-0021 江東区自河1-3-13-106 Tel. 03-5639-2811 Fax. 5639-2822
辻本 智子	(株)辻本智子環境デザイン研究所 〒656-2401 兵庫県津名郡淡路町岩屋3000-176 Tel&Faxは変更なし
土井 勉	神戸国際大学経済学部都市文化経済学科 〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中9-1-6 Tel. 078-845-3561 Fax. 845-3200

編集後記

今回のJUDI公報キャラバン隊は、釧路、帯広、札幌の3ヶ所を訪れた。

最初に訪れた釧路では、街の中心の飲み屋街に閑古鳥が鳴いているを見た。中央の会社の支店の統廃合によって、社用族が激減した結果である。低迷を続ける経済が地方に与える打撃の大きさを改めて実感した一方、釧路川沿いに建設が進むプロムナードや、喫茶店に生まれ変わった倉庫を見て、釧路の新しい胎動を感じ、少し救われた気分になった。

次に訪れた帯広では、駅前に林立するホテル群にキャラバン隊メンバーから驚きの声が上がった。観光地でもないのに、なぜこんなに沢山ホテルが必要なのか？タクシーの運転手の話では、多くの会社が釧路から帯広に支店を移した結果だそうな。釧路、ああ無情。

帯広では筆者も象設計集団と一緒にいくつか仕事を手がけた。施主は十勝毎日新聞のオーナーや農業土木の建設会社など、帯広に根を下ろして仕事をしている人たちである。洋菓子で有名な六花亭の本拠地も帯広にあり、古い倉庫を美術館として公開している。わずかではあるが、帯広には文化としての街づくりが芽づき始めているのが感じられる。

札幌では、北海道ブロックが開催するフォーラムに参加した。「日本の都市環境デザイン・北海道編」に発表された内容を執筆者から直接聞き、本を読んだだけでは分からなかった当時の開拓手法を理解することが出来た。

本にするだけに終わらず、このような発表の場を設けることも、JUDIの大変な活動として位置づける必要があろう。

(近田玲子)

広報・出版委員会

澤木 俊岡	石崎 均
土田 旭	伊藤 光造
近田 玲子	加茂みどり
菅 孝能	河本 一行
中嶋 猛夫	森川 稔
櫻井 淳	横山あおい
松村みち子	吉田 慎悟
白濱 力	作山 康